
流星香
Seika Nagare
お庭番
望月蒼司朗
参る！
入学式と不思議の色石
ビーズログ文庫

B's-LOG BUNKO

お庭番望月蒼司朗参る！

入学式と不思議の色石

流　星香
Seika Nagare

ビーズログ文庫

B's-LOG BUNKO

お庭番望月蒼司朗参る！

入学式と不思議の色石

流　星香
Seika Nagare

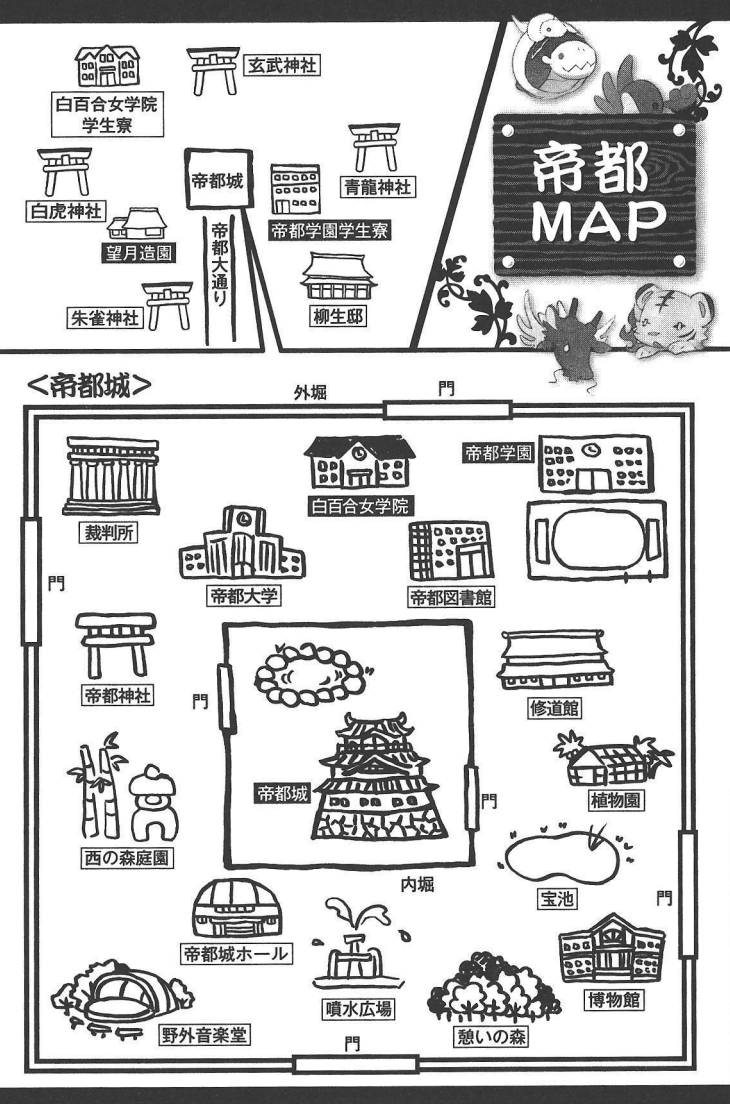
ビーズログ文庫

イラスト／榊空也


お庭番
望月蒼司朗
参る！
入学式と不思議の色石


お庭番
望月蒼司朗
八百万と不思議の色石
登場人物紹介
映璃
帝都学園高等部二年生。
見目麗しい帝都城の若様。
篠原勇輝
帝都学園高等部二年生。
白虎神社の巫であり白虎の戦士。
望月蒼司朗
帝都学園高等部一年生。
奥庭のお庭番兼ビヨ四神様お世話係。
望月清志朗
帝都学園高等部二年生。
蒼司朗の従兄弟。


芙蓉薫子
帝都大学一年生。
朱雀神社の巫であり朱雀の戦士。
安藤奏
帝都学園中等部三年生。
青龍神社の巫であり
青龍の戦士。
蔵田実親
帝都大学一年生。
玄武神社の巫であり
玄武の戦士。
入谷
宝飾品店の店員。
望威
異国から留学してきた、
帝都学園高等部一年生。
帝都で宝飾品店を開く。
那智
望威のお目付役。


帝都MAP
白百合女学院
学生寮
玄武神社
白虎神社
望月造園
帝都城
帝都大通り
青龍神社
帝都学園学生寮
朱雀神社
柳生邸
<帝都城>
外堀
門
裁判所
白百合女学院
帝都学園
帝都大学
帝都図書館
帝都神社
修道館
帝都城
植物園
西の森庭園
内堀
宝池
帝都城ホール
噴水広場
博物館
野外音楽堂
憩いの森

1

首都帝都、華やかなる中心地、帝都城下は四方を壁で囲まれた、強固な結界領域である。

年度替わりの四月、帝都は進学や就職で新しく住民となる者たちが、初々しい姿で行き交っている。

観光地でもある帝都では、住民も『帝都』を象徴する一部として行動しなければならない。外出時には皆、自分の所属する場所の制服を着用しなければならないという決まりがある。

入学式の前日である今日は、明日からの新生活に備えて、足りないものを補充しておこうと町で買い物をしている新入学生が大勢いた。

「制服に着られてる感じだなぁ」

地図を片手に覚束ない足取りで歩いていく、プレスのラインも眩しい新品の制服を着た

者たちを眺め、くすっと望月蒼司朗は笑う。

「って、オレもこのあと、あんな感じか」

擦り切れた袖口を眺め、刃に袋を被せた枝打ち斧を持ち直した蒼司朗は軽く肩を竦めて、帝都学園の制服を扱っている紳士服専門店に向かう。

規定サイズの制服なら、学生寮の購買部にいつでも在庫があるし、たとえ売り切れていても取り寄せてもらえばすぐに手に入る。だが学年一小柄な蒼司朗は、規定サイズでは大きすぎるので、発注して自分サイズの制服を作ってもらわなければならない。特注サイズの制服は、大量生産している縫製工場ではなく、指定店でのオーダーメイドだ。

「半年で学生服を新調された方は、当店でも初めてでございますよ」

髭まで上品なロマンスグレーの紳士服店の店主は苦笑しながら、仕立て上がった制服を出してきて、来店した蒼司朗を試着室に案内した。

「学生さんは成長期ですから、通常はもう少し余裕を持たせるのですが、望月様は制服を作り直されるほうが早いかと思いまして、身体を動かしやすい大きさにいたしました」

「――ありがとうございます」

複雑な気分で笑い返して、蒼司朗は試着室に入り、枝打ち斧を壁に立てかけて制服を着替える。

「ミギャ」

蒼司朗がボタンを外した学生服の胸元から、ひょこっと小さな白虎が頭を出す。

「キュア」

襟の後ろに隠れていた小さな青龍も、蒼司朗と同じように鏡を覗き、髪の間からは小さな朱雀、学生服のポケットから小さな玄武が顔を出す。

「チュピ」

「「(しゅー)」」

「こら、お前ら……！」

初めて入った店の試着室を、珍しそうに見回し、ご機嫌な様子の小さな四神様に、蒼司朗は慌てる。

ピヨピヨの赤ちゃんサイズになって、性格や行動まで赤ちゃん返りしているピヨ四神様は、好奇心旺盛だ。着替えている最中に、どこかに飛びだして行かれては困る――！

「いかがでございますか？　望月様」
何やら不穏な雰囲気を感じ取り、試着室の外にいた店主が声をかける。

店主の声に驚いて、ピヨ四神たちは、ぱっと頭を引っこめた。
（ったく、もう……）
蒼司朗がお世話係に任ぜられている帝都城奥庭の四神様は、好奇心旺盛なくせに内弁慶だ。きゅっと小さくなったピヨ四神様を、ちょいちょいと指先で撫でて可愛がって、蒼司朗は学生服を脱ぎ、ハンガーにかけた。
ピヨ四神は脱がれた学生服のほうにくっついて、きょろんと顔を出し、円らな瞳で蒼司朗の着替えを見つめる。

「具合の悪い場所がございましたら、手直しさせていただきますが……」

「はい、ありがとうございます。ちょっと待ってください」
蒼司朗は返事をして、急いで新しい制服に着替える。

学生服は腕の長さも胸回りも、ちょうどいいのだが。
（うわー……）
ズボンの裾が長い。

「お召し替えはお済みですか？」
「あ、はい」
蒼司朗の返事を聞いて、一呼吸置いてから、そっと店主は試着室のカーテンを開いた。
試着室のハンガーにかけられた学生服には、ピヨ四神がくっついているのだが、ここは結界内ではないので、霊力のない者にはピヨ四神の姿は見えない。

「腕や足を曲げ伸ばししたり、身体を動かしたりしてみてください。傷んだ部分を考慮して、望月様のものは、型紙を少々変えさせていただきました。見た目にはわかりませんが、これまでのものとはかなり着心地が違っているはずですよ」
店主に言われて、蒼司朗は腕を動かし、身体を捻って、制服の具合を確かめる。
ラインやシルエットの綺麗な洋服は、動いた場合どこか窮屈なところがあるものなのだが、今着ているこの学生服にはそれがまったくない。同じに見えるが、全然違う。

「はい、前のよりすごく動きやすい感じですけど……」
蒼司朗は、余っているズボンの裾を、なんとも言えない顔で見つめる。
店主は柔らかく微笑む。
「裾は、折り返しがまだでございましたね」
そっと身を屈めた店主は、蒼司朗の前に跪き、丁寧な手つきで裾を折り曲げた。

「ミギャ」
「キュウ」
「チュピ」
「「(しゅー)」」
裾が直されていく様を近くでよく見ようと、ピヨ四神は蒼司朗に飛び移る。
(こら、あんまり前に乗りだすと、落っこちるぞ)
そっとピヨ四神を手で宥めて、蒼司朗は店主の作業の邪魔にならないよう、おとなしくさせる。

余りまくっているように見えた裾は、店主の手で綺麗に折り返されていく。

「望月様、少々、そのままで」
動かないように蒼司朗に言い、袖に留めていた針山から針と糸を取った店主は、ちょっちょっと縫い留めて、裾の折り返しを仕上げた。
店主は腰を上げながら、蒼司朗に告げる。
「採寸を行いましたときより、いくらか脚が長くなっていらっしゃるようですね」
「え？　そうですか？」
蒼司朗は目をぱちくりと瞬く。
採寸をしたのは、三週間前のことだ。十月に新調したときのままのサイズでいいのではないかと皆に言われていたし、蒼司朗も大丈夫だと考えていたのだが、ぜひにと店主に勧められて、恥ずかしい思いをしながら採寸した。
小さい小さいとからかわれることばかりで、伸びていると言われることなどない蒼司朗には、新鮮な言葉だ。
「成長期の学生さんのお洋服の仕立てには、いくらか余裕を持たせてあります。ご家庭でお直しされましても、窮屈さや寸足らずを感じられましたら、いつでもご来店ください。すぐにお直しいたしますよ」
「はい、ありがとうございます。お世話になります」

元気よくお辞儀した蒼司朗に店主は穏やかな笑みを浮かべ、試着室の中の学生服を見る。

「それでは、こちらの制服は、私どものほうで片づけさせていただいてもよろしゅうございますか？」

「はい。よろしくお願いします」

蒼司朗は店主に頷く。

仕立て代は先に支払っていて、受け取りに来ただけの今日はポケットに何も入れてこなかった。このまま渡しても大丈夫だ。

帝都学園高等部指定学生服は、学内に偽学生が侵入したり、帝都学園の学生を騙る者が出るのを防止するために、管理に十分注意するようにと言われている。盗難の被害にあった場合にも、状況に応じて、所有者には罰則がある。

古くなったり、もう着ることのない制服は、自分で責任を持って管理できない場合、指定業者に処分を依頼するのが安全だ。

店主が引き取ってくれるのならば、蒼司朗には願ったりだ。

「今度は、お役目の際にも袖がほつれたり、脇が裂けたりすることはありませんよ」

枝打ち斧を握った蒼司朗に、にっこりと店主は微笑む。
外から見えないよう、伯母が丁寧に繕ってくれていたが、袖山の縫い目がほつれたり、脇の縫い目が裂けて、何度も補修したのを見抜かれていたようだ。
「え、と、すみません……」
乱暴な着方をしてと恐縮する蒼司朗に、店主は柔らかく微笑む。
「いえいえ。もとより、こちらの制服は激しい運動に適したデザインではございませんので、窮屈な思いをさせてしまいまして、申し訳ありません。わたくしどもに協力できますのは、これぐらいですが、奥庭の四神様と、どうぞこれからも帝都をお護りください」
微笑んだ店主は、ちらりと店内にある鏡に視線を送る。

蒼司朗の姿が映っていた鏡には、甘えてくっついているピヨ四神の姿も一緒に映っていた。人の目には見えないが、鏡や写真でピヨ四神の姿が見えることがあるのだ。

（あ、ひょっとして……）
蒼司朗はようやく気づく。
この前も今日も、来店したときからずっと、店主にはピヨ四神がどこでどうしているの

か、わかっていたのかもしれない。

好奇の視線を送って失礼にならないよう、見えていないものと思って勝手気ままに振る舞っているピヨ四神に、気づかないふりをしてくれていたのだろう。

制服着用の記念に、店主は古い学生服から外した金ボタンを小袋に入れて、蒼司朗に渡した。

「またのご来店をお待ちしております」

穏やかに微笑む店主にお辞儀して、蒼司朗は店を出た。

着心地のいい制服で、機嫌よく歩きながら、くすっと蒼司朗は笑う。

「オレが大人になったら、さっきの店で背広を仕立ててみたいけど……、たぶん、着ていくところなんてないだろうなぁ」

蒼司朗が目指しているのは、一流の庭師、そして奥庭のお庭番に相応しい格を持つ神官。庭師はスーツで仕事をしないし、父や伯父、祖父の礼装は和服だった。蒼司朗や清志朗の代になって、突然洋装になることはないだろう。神官の礼装も、神官装束のバリエーションだ。

帝都の一流店のお世話になれるのは、帝都学園に通う間だけのようだ。

来店前に思っていたとおり、新品の制服を着た蒼司朗は、学年一小柄な体格のせいもあって、新入生のように見えた。道に明るい様子なので、地方から進学のために上京した子供ではなく、元気な帝都っ子という感じだ。

やはりサイズが小さくて、購買部では買えない新しい靴を買って、店で履き替えて、蒼司朗は帰路に――――。

「ピ！」

頭上で警告するような鋭い声で鳴いたチビ朱雀に、はっとして蒼司朗は歩く速度を緩める。

（どこだ!?）

大きな動作できょろきょろと見回すと、何かしようとしている怪しい連中に気づかれる。できるだけさり気なく、周りの様子を探ろうとした蒼司朗の制服のポケットで、顔を出していたチビ玄武が、ぴくっと反応した。

「「（しゅー！）」」

（そっちか）

蒼司朗は不自然にならないよう、注意して、チビ玄武が知らせるほうに振り向く。

公園の向こうの道に、いかにも地方から出てきたばかりという様子の、帝都学園中等部の新一年生らしき少年がいて、その近くに書生らしい男が一人いるのが見えた。二人の近くには、他に誰もいない。

男は帝都のどこにでもよく見かける、ごく普通の書生のようだが、帝都の不届き者をこれまで大勢成敗してきた蒼司朗の目には、どうにも胡散くさい感じに見える。

しかし――――。

「ちょっと遠いな……」

蒼司朗が今いる場所からは、何を話しているのか聞こえない。

「キュオ」

肩に乗って後ろ肢で立ち上がったチビ青龍が、蒼司朗の右耳に、はむっと食いついた。

「っ……！」

赤ちゃんサイズのピヨ四神は歯が生えていないので、痛くはない。びっくりしただけだ。

「――宝仙堂洋靴店なら、今、改装中で、別の場所にありますよ」

遠くにいるはずの書生の声が、すぐ目の前にでもいるかのように、はっきり聞こえた。

（四神様の力か）

初めてのことなので驚いたが、蒼司朗は動揺しないようにして、耳を澄ます。

「宝仙堂洋靴店……」

若様や帝の靴を作っている、帝都の有名一流店だ。高級で履き心地のいい靴を作ってくれる店として知られているが、どんなに金を積もうとも、確かな者の紹介がないと顧客になれない。店の場所も、ちょっと入り組んだ路地の奥なので、その店が帝都にあることを知っていても、誰もがその店を見たことがあるというわけではない。

初めて来店する者は、地図を持っていても辿り着けないことがよくある店だ。

望月造園は庭の手入れを任されているので、蒼司朗は庭師見習いの一人として、仕事で宝仙堂洋靴店に行ったことがある。

少年が地図を見て歩いてきたように、宝仙堂洋靴店は確かにこの近くにある。

少年は書生の言葉に、きょとんと目を瞬く。
「え？　そうなんですか？」
標準語を使おうとしているが、どこかイントネーションが違う声で言って、少年は書生を見つめる。書生は当然とばかりに頷いた。
「予約をしていた人には、ちゃんと連絡が行ってたはずなんですけどね」
「……そう、ですか。おかしいですね」
新中学生の少年は、しゅんとした様子で視線を下げる。
「連絡の葉書のない人は店に入れないんだけど……」
「僕、予約伝票持ってます！　今日受け取りに行くことになってました！」
「あぁ、それならきっと大丈夫ですね。じゃあ、一緒に行きますか？　今ちょうど先生に使いを頼まれて、そこに行こうとしていたところなんです」
青二才の書生ごときが出入りできる店ではないが、先生と呼ばれるような人物ならば、かの洋靴店の顧客に相応しく思える。店に使いに行って、不自然ではない。
「ありがとうございます、助かります……！」
少年は晴れやかに微笑み、書生に促（うなが）されて歩きだす。
宝仙堂洋靴店とは、違う方向に向かって。

「ピ！」

「うん！」

蒼司朗は枝打ち斧の柄を握り直す。

（誘拐犯だ）

進学のために帝都に来て、宝仙堂洋靴店で靴を作ってもらうような少年なら、間違いなく地方の名家の子息だ。

宝仙堂洋靴店は代金先払いの店なので、少年は大金を持って歩いてはいないだろうが、連れもなく慣れない帝都を歩いていたならば、身代金目的の誘拐の標的には十分だ。

少年を連れた書生は、にこやかに会話しながら、人通りの少ない道へと進む。和やかな様子の二人は、傍目には知り合いのようだ。誘拐を目論む悪い人に、少年が自分からついていっているとは、とても見えない。

書生は少年を連れて細い路地に入ろうとして、足を止めた。草履と足袋の間に小石が入ったらしい。しゃがんで小石を取る書生を、少年は行儀よく待っている。

路地の向こうから老紳士が歩いてきて、しゃがんでいる書生と少年の横を通りすぎた。老紳士と擦れ違って、書生は腰を上げて歩きだす。少年は嬉々として書生についていく。

書生が顔を下向けていたため、擦れ違った老紳士に書生の顔は見えなかった。少年の横に書生がいたことは覚えていても、体格などの特徴もよくわからなかったことだろう。

（時間稼ぎをしたな）

後をつけていることに気づかれないよう、距離を保ったまま監視していた蒼司朗は、あの路地が怪しいと睨む。

（あそこは見通しが悪い）

書生と少年が路地に入って視界から消えるのを待って、蒼司朗は走って一気に距離を縮める。

用心しながら、そっと角から覗きこんだ路地には、ライトバンが一台停まっていた。その後部荷台に、ぐったりとした少年が男に抱え上げられて入れられる――――。

誘拐の現行犯だ！

「お庭番、望月蒼司朗、参る！」

枝打ち斧を握った蒼司朗は、路地へと駆けこむ。
一気に弾丸のように迫った小柄な人影に、少年を運び入れた書生が、はっと振り返る。
「なんだ、おま……」
振り返った書生は、刃を返した蒼司朗の枝打ち斧に薙ぎ払われ、路地に叩きつけられた。
運転席にいて、サイドミラーで様子を見ていた男が、突然の出来事に、ぎょっとする。
「――――おいっ!?」
単独犯ではなく、仲間が一人いたようだ。
運転席から急いで降りてきた男に、蒼司朗が繰りだした枝打ち斧の柄が激突する。
白目を剝いて、どさっと倒れた男に、路地を通ろうと足を踏み入れた二人連れの婦人が驚いて足を竦ませた。
小さくあげられた悲鳴に気づき、蒼司朗は振り返る。
「警察を呼んでください！　誘拐犯です！」

意識を失っている様子で荷台から半分ずり落ちかけた少年と、路地に転がる二人の男。
そして、真新しい帝都学園高等部の制服を着た小柄な少年。
婦人たちはサイレンのように大声で叫び、警察を呼んだ。

2

「営利誘拐は、帝都の春の風物詩なんですよー」

涼やかな声で呑気に言われて、誘拐犯を警察に引き渡し、被害者の少年を乗せた救急車を見送った蒼司朗は、何ごとかと集まっていた野次馬のほうに振り返る。

「小此木神官長……！」

急いでお辞儀した蒼司朗に、小此木神官長の近くにいた者たちが驚いて退いた。

帝都神社の小此木神官長は、帝都の神社の神官すべての上に立つ超一級の神官であり、帝都の神事を司る最高責任者だ。

帝に次ぐ帝都の要人が、警護となる神官も引き連れず、飄々と一人歩きしていようとは。

こんなに近くで神官長の姿を目にする機会などないだろうが、じろじろと眺めるのは大

変失礼なので、野次馬たちはそそくさと散っていく。小此木神官長のおかげで、見せ物になっていた状況から解放されて、蒼司朗はほっとする。

「今日もお庭番様は大活躍ですね～」

年齢不詳の優男にしか見えない神官長様は、のほほんと微笑む。小首を傾げた拍子に、右耳の上あたりに留まっていたヘアピンの桜の造花が、ひらりと揺れた。小此木神官長が自分で買ったとは思えないので、誰かからの頂きものだろうが、若い娘用のヘアアクセなのに、よく似合っているところがコワイ。

「オレの活躍なんてないほうがいいですよ。それにしても、風物詩って……」

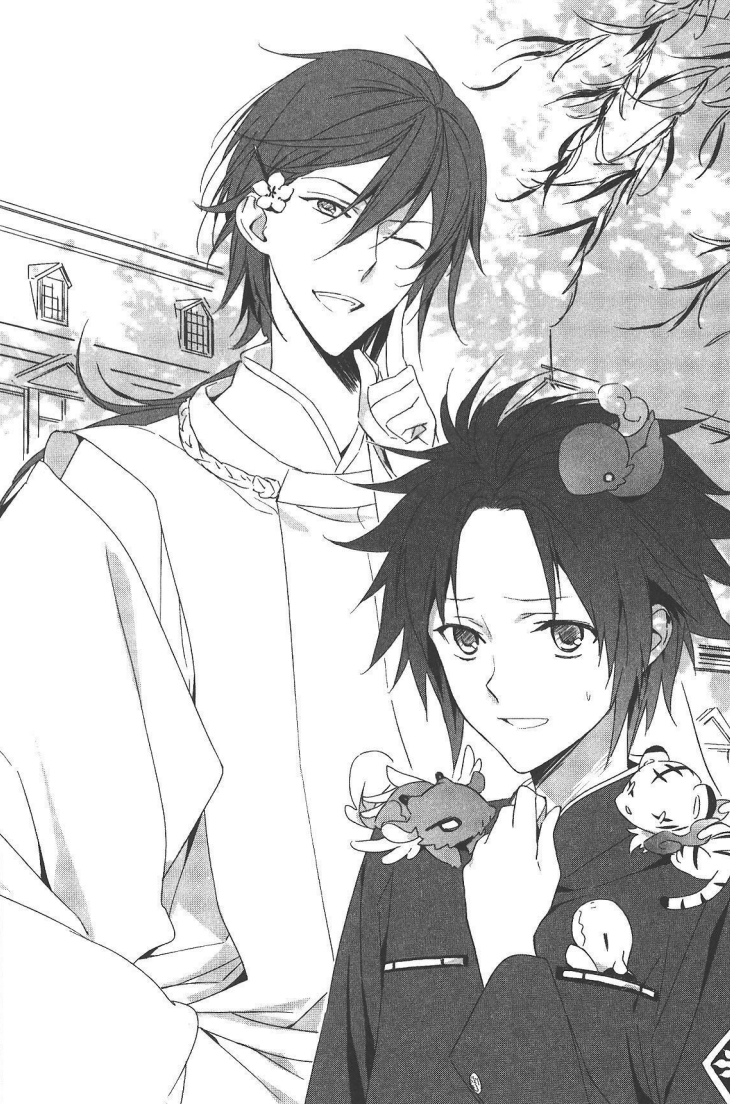
苦笑する気力も萎えて、蒼司朗は脱力感に襲われる。

ずいぶん物騒な風物詩だ。

「帝都に来て間もない児童や生徒は、毎年春に何十人か誘拐されてますよ」

「なっ、何十人か!?」

さっき蒼司朗が捕まえた、二人組の誘拐犯の車には、先にもう一人、新中学生らしき制服姿の少年が乗っていた。だから救急車で搬送された少年は、二人だ。



蒼司朗は驚くが、小此木神官長はすっかり慣れっこになっているのか、なんでもないことのように頷く。

「帝都に入った不穏な輩には公儀隠密の監視がついてますし、帝都の保護下にある子供を帝都から連れだすなんてできません。大事になる前に必ず犯人は逮捕されて、被害者は全員無事に保護されていますから、心配ありませんよ。しかし、これまでに一度として成功した試しがないのに、誘拐事件がなくならないのは、どうしてでしょうねぇ」

「それは……」

帝都警察と公儀隠密の尽力によって帝都の治安がいいからなのだが、帝都城下はいかにも世間知らずのお金持ちのお坊ちゃまたちが、ふわふわと無防備にそこらを歩いている。犯罪者予備軍の目には、簡単にゲットできる金の引換券が歩いているように見えるから誘拐してしまうのだと思うが、そう指摘するのも憚られて蒼司朗は口を噤む。

蒼司朗の学生服を近くで見て、小此木神官長はにこにこと笑う。

「学生服を新調したんですね。昨日まで着ていたのは、あちこち擦り切れて傷んでましたものね。うんうん、帝都城の名誉あるお庭番として、大変結構。身なりをきちんとしてお

くことは大切です。初々しくて、まるで新一年生のようですねー」

「神官長、それ、ほめ言葉じゃないです……」

学年一小柄な蒼司朗は、二年に進級しても、身長を追い抜かしている新一年生と大勢遭遇することだろう。

「蒼司朗くんは帝都の平和を乱す不逞の輩と間違えられることは、絶対にないから、楽でしょう？　今回の事情説明も簡単でしたよね」

「そ、れは、そうですけど……」

真面目で誠実な性格の蒼司朗は、相貌にもそれが表れている。そして小柄な身体は、保護しなければならない弱者の存在を印象づける。不逞の輩と対峙した場合、事情を知らない誰がいつ見ても、蒼司朗が何か悪いことをしたとは思われない。

帝都の有名名門校である帝都学園高等部の学生服を着ている蒼司朗が、どこの誰かわからない書生姿の男と揉めていたなら、ピヨ四神の加護がなくても、世間一般は当然のように蒼司朗に味方する。蒼司朗を守らなければならない使命感にかられるだろう。

蒼司朗自身は決して弱くはないのだが、人をそう動かすものがある。

「蒼司朗くんは奥庭のお庭番として帝都の有名人の仲間入りをしましたけど、他の四神の戦士のみなさんほどは、まだまだ顔と名前が広く知られているわけではありませんからね。こうしてだんだんと覚えていってもらうのは、とてもいいですね。帝都を騒がせる賊と同じくらいの年になる頃には、警察署だって顔パスでいけますよ」

「そう、ですね」

にこにこと話す小此木神官長の言葉は、確かにそのとおりなのだが。

（あれ？　それって……）

ふと考えた蒼司朗を、ピヨ四神が円らな瞳で見つめる。

「ミギャ？」

「キュウ」

「チュピ」

「「（しゅー）」」

ピヨ四神を見つめ返して、蒼司朗は息を吐く。

（考えすぎだ、オレ……）

将来のことを考えて、高校生の蒼司朗をお庭番に選んだのかもしれない、なんて。

「城下で遊んでると、神官の人たちに叱られますよ？」

言った蒼司朗に、小此木神官長は笑う。

「嫌だなぁ、僕は仕事で外出してるだけですよー」

「口の端に、きな粉ついてます」

そっと指さした蒼司朗に、小此木神官長は慌てて口を手で隠して横を向いた。小此木神官長は城下で何かいい物を食べてきたらしいと、ピヨ四神がキランと目を輝かせる。

「ミギャギャ」

「欲しがらない！」

おやつやご飯は決まった時間に。

「キュウ～」

すかさずぴしっと叱った蒼司朗に、ピヨ四神はしゅんとなる。

いじけないように順番にピヨ四神を撫でて可愛がって機嫌を直させて、蒼司朗は小此木神官長に礼をする。

「もうお仕事は終わられたようですから、まっすぐ帝都神社に帰ってください」

そう言った蒼司朗の耳に、やや離れたところで叫びあう声が聞こえた。

「姿を見かけた者がいたぞ！　神官長はあっちだ！」

「逃がすな！」

「神社にお戻りいただくのだ！」

何やら物々しいが、帝都神社の神官による小此木神官長の強制帰還が行われようとしているらしい。

出ていったきり、連絡もなくどれだけ城下で遊び呆けていたものやら。

「では、ご機嫌よう！　蒼司朗くん」

口の端に残っていたきな粉を綺麗に落とした小此木神官長は、笑顔でくるっと身を翻した。

捜索に出た神官たちより先に帰り着けたなら、小此木神官長は素知らぬふりをして帝都神社に戻れる。強制的に連れ帰られたなら、次の外出からは、必ず監視役の神官が同行し、どんな寄り道も許さないことになるだろう。買い食いが大好きな小此木神官長にとっては、

由々しき問題である。

蒼司朗に背を向けた小此木神官長は、神官たちの声が聞こえたのとは逆方向に、脱兎の勢いで駆けていった。

「っと、ヤバ……！」

蒼司朗を見かけると小此木神官長が足を止めることは、神官の誰もが知っている。

小此木神官長を追いかけている神官たちに見つかって、小此木神官長と立ち話していたことが知れると、蒼司朗が小此木神官長を引き止めて、世話をかけていたのだと誤解されかねない。

神官たちに見つからないよう、蒼司朗は急いで近くの路地に入って身を隠す。

蒼司朗がつい今までいた場所を、帝都神社の屈強な神官が四人、殺気立った様子で駆け抜けていった。

「――――とりあえず、セーフ」

集まっていた人たちには、蒼司朗と小此木神官長が一緒にいたことを知られているので、時間の問題かもしれないが。

「早く帝都神社に帰ってください、神官長」

蒼司朗が小此木神官長を引き止めていたと、神官たちに誤解されることがないように。小此木神官長は自分が不利になるような、余計なことは絶対に言わない主義なので、神官たちに誤解されて蒼司朗が睨まれても、誤解を解いてくれるとは思えない。

神のご加護がありますようにと、蒼司朗はピヨ四神を撫で撫でと可愛がっておく。

「……神官たちがいない道を行こう」

ピヨ四神に聞こえるように宣言して、蒼司朗は路地を出る。

帝都城奥庭の四神様の加護を受けている蒼司朗は、守ってくれるように祈ったり、お菓子を献上して頼むことだってできるのだが、日常の些細なことで、それはしたくない。神の力は然るべきときに使われるものだと、蒼司朗は思う。

ただ、見つけたら、教えてもらうぐらいはいいだろう。

「ピ！」

商店街を通り抜けて、望月造園に戻ろうとした蒼司朗は、頭の上で鳴いたチビ朱雀の声に、はっと緊張する。

あの誘拐のように何かの事件か、それとも帝都神社の神官か。

用心深く様子を窺った蒼司朗は、就学前の幼児が一人、足を止め、じっと立ち尽くしているのを見つけた。

商店街なので通行人は何人もいるが、近くにその子供の保護者らしい者はいない。

「……迷子？」

「チュピ」

「ミギュギュ」

「キュイ」

「「（しゅー）」」

同伴した大人は、すぐ近くの店で買い物をしているのだろうと思うが、ピヨ四神が騒ぐので、放っておくわけにもいかず、蒼司朗は子供に近づく。

子供は近づいてきて足を止めた蒼司朗を、無垢な目で見上げた。

（あれ？　この子……）

服装だけではなく、なんとなく、帝都の子供とは雰囲気が違う。帝都の外から、遊びに来た子のようだ。

子供と目の高さを合わせるため、蒼司朗は身を屈めて訊ねる。

「どうしたの？　道に迷った？」
子供は蒼司朗をじっと見て、おもむろに口を開いた。
「我は迷子に非ズ。気遣いハ無用」
表情の乏しさや、なんだか偉そうな口調よりも、イントネーションと発音の怪しさに、蒼司朗は目を瞬く。近くでよく見れば、着ているものも、なんだか変わっている。
（違う、この子……、外国人だ）
地方都市から帝都に来たから、言葉が訛っているというのではない。別の言語を覚えたあとに、発音の基礎が違う言語を覚えて話すと、こんな感じになるだろう。
正月に来日したアンジェ姫のように、明らかに人種が違うとわかる外国人ではない、同系の種族での外国人だ。
文化の交流都市でもある帝都は、他の地方都市と比べて、外国人観光客が多く訪れる。一見して外国人とわかる者たちもいれば、見た目ではわからず、話している言葉を聞いて外国人だとわかる者もいる。

「連れハじきに来ヨウ」
「そう、なんだ？」
見回しても、それらしい人物が近づいてくる様子はない。来るとしても、もう少し時間がかかりそうだ。
（とりあえず、一人でいさせるのは、よくないよな）
さっきの誘拐犯のような悪い人間に目をつけられた場合、きっと抱え上げられて、簡単に連れ去られてしまうだろう。幼い子供が暴れて抵抗したとしても、自分の子供がぐずっているのだと見せかけてしまえば、きっと誰も妙だとは思わない。
「キュイ」
肩に乗っていたチビ青龍が一声鳴き、こっちを見てとばかりに蒼司朗の襟を引っ張る。
商店街で福引を行う催事スペースがあり、ベンチがあった。
「ここで立って待っていると、通る人の邪魔になるから、あっちで座って待たないかい？」
誘いかけた蒼司朗の言葉に、子供はそちらに目をやり、思案する。

「……諾」

通行人が壁になると、小さな子供の身体はどうしても視界から消えてしまう。あの場所にあるベンチなら、商店街を通る者がよく見えるし、商店街を通っている者からもベンチに座っている者がはっきり見える。

ベンチに向かって歩きだした子供は、一緒に来る蒼司朗に眉を顰める。

「我ニ用事ありヤ？」

「うん？　いや、オレもあそこで、人を待つんだ」

子供が連れと会うのを見届けてから、蒼司朗は子供から離れようと思う。

「……ふム」

子供はじろりと蒼司朗を眺め、そして納得した様子で、それ以上何も言わなかった。

「「（しゅー）」」

子供と少し離れて、ベンチに腰掛けた蒼司朗の学生服のポケットから、チビ玄武が顔を出し、蒼司朗を見上げる。

（あー……）

戻るのは遅くなってしまうが、それはもう、誘拐犯を警察に引き渡し、被害者が救急車

で搬送されるのを見送った時点で、十分に道草を食っている。迷子の付き合いをして、時間を食ったとしても、たいした違いはないだろう。

（おやつの時間までには帰るよ）

蒼司朗はチビ玄武を、そっと指で可愛がる。

赤ん坊サイズのピヨ四神は、こまめに食事をとらなくてはいけない。新調した学生服を受け取りに来ただけの蒼司朗は、財布を持ってこなかったので、近くの店でおやつを買って、ピヨ四神に食べさせてやることはできない。

（このまま、ちょっと様子を見て……誰も来ないようなら、交番に連れていくか）

交番は商店街の少し先にある。交番で子供を保護してもらえば、安心だ。子供を探している大人が、待っているかもしれない。

少し様子を見ようと呑気に構えていた蒼司朗は、子供がいきなりベンチから立ち上がって、びっくりする。

「申ス！」

子供が発した大声に、商店街をきょろきょろしながら歩いていた男が、はっと振り向いた。

「ナチ～！」

大声で叫んだ男は、安心したという表情で、ベンチにいる子供に向かって走ってきた。

「先に行っちゃうなんてひどいヨー、探しちゃったじゃないカー！」

子供は無表情なのに、男は半べそをかいていた。とても表情豊かだ。

だだだだーっと走ってきた男は、がばーっと子供に抱きつく。

「苦シイ！」

縋りついた男の頭に、子供は小さな拳を振り下ろした。

「痛イ痛イ」

男は子供から手を離し、両手で頭を抱えているが、子供の拳なんて、大げさに騒ぐほど痛くはなかっただろう。

「よそ見をするナと言ったハズ！」

ふんとばかりに、子供は腕組みし、男の前に仁王立ちする。

「それは聞いタ。聞いたケドー……！」

「寄り道セズ、帰るゾ！」

会話を聞いていると、なんだか、大人と子供の立場が逆転しているような気がする。
（大学生くらいかな）
男は背が高いが、社会人という雰囲気ではない。

（観光に来た旅行者、じゃないのかな）
帝都では、外国語で話すことは禁止されている。こちらの言葉が話せない外国人には、通訳がつけられる決まりがある。通訳は観光ガイドもしてくれるので、外国からの旅行者にとっては大変助かるのだが、行動がすべてオープンになる。商用や就学のために帝都に来る外国人にも、これは適応される。
帝都の監視を受けているようだと、通訳の同行を好まない者は、不自由しないように自国でしっかり言葉を勉強してからやって来る。
子供も大人も軽装だ。通訳は同行していないし、荷物らしいものがない。

しかし、とりあえず、子供の同伴者が来たようだし、彼らは自力で帰れるようなので。
（オレが一緒にいる必要はないよね）
蒼司朗は枝打ち斧を持って、ベンチから腰を上げる。

「お兄さんが見つかってよかったね。それじゃあね」
にこっと微笑んで、蒼司朗は子供に手を振る。
「あァ」
子供は立ち去る蒼司朗に会釈した。
人を待っているのだと子供に言っていた蒼司朗は、誰がどこに来たのか追及されないように、その場を走り去った。

子供の横柄で偉そうな口調に、大英皇国から来た小さなお姫様を思い出し、走りながら蒼司朗は笑う。
「あの子も、お爺さんっ子なのかなぁ」
小さな子供は、いつも身近にいる者の言葉遣いをそのまま真似してしまうものだ。

3

帝都学園高等部では進級する新二、三年生の一学期の始業式は、新一年生の入学式の翌日だ。新一年生を迎える入学式は在校生全員参加ではなく、教職員と生徒会役員、学年代表の生徒や、クラブ紹介を行う部長・副部長などが参加する。

「え？　オレも行くの？」

蒼司朗は寮の二段ベッドでピヨ四神を寝かしつけながら、きょとんと目を瞬く。

「オレ成績そんなによくないし、生徒会役員でもないし、何もやってないのに？　あ、ほら、打ち合わせにも行ってないじゃん」

自分も入学式に出席しなければならないとは思ってもいなかった蒼司朗に、勉強机の椅子に腰掛けて、制服にエチケットブラシをかけながら、清志朗は苦笑する。

「蒼くんは、帝都城奥庭のお庭番様だよ。立派に名誉生徒じゃないか。学校の式典には列

席しないとダメだろう？」

「でも、オレそんな連絡なんてもらってないし……」

往生際悪くぐずる蒼司朗に、やれやれと清志朗は呆れる。

「今さらだよ。わかってると思って、連絡されなかったんだってば。明日、奥庭の仕事が終わったら、学校だからね」

「うーん……」

蒼司朗はベッドに突っ伏して唸る。

何やら考えているらしい蒼司朗に、ブラシをかけ終わった学生服をハンガーに戻し、清志朗は言う。

「学生服を寮に忘れてきたから、なんて言い訳はきかないよ。忘れ物がないか、ちゃんと見てから出かけるし。蒼くんが学生服を隠して見つからないようにしたなら、神官装束で出席してもらうからね」

付き合いの長い清志朗には蒼司朗の考えそうなことなんて、お見通しだ。

「き、清ちゃあん……！」

学生服がなければと、思い浮かんだ浅知恵を見破られた蒼司朗は、情けない顔を上げて清志朗を見る。

自分のベッドに向かいながら、清志朗は蒼司朗に、にっこりと微笑む。
「大丈夫、列席するだけだよ。挨拶とか、新入生に贈る言葉とか、そういうのないから」
壇に上がって挨拶するようなことがあったなら、清志朗は事前に蒼司朗に伝えて、スピーチの原稿の作成に協力していただろう。
「年に一度のことだから、ね？」
「うん……。清ちゃんが一緒なら、いいや」
近くには座れなくても、清志朗がいるなら、蒼司朗は心強い。
大丈夫だと清志朗が言うのなら、心配することはないのだろう。

翌朝、ピヨ四神を連れて帝都城に向かい、奥庭で仕事をした蒼司朗は、社務所で清志朗と一緒に朝食をとり、学校に向かった。

帝都学園は全寮制だ。
入学式が終わり、新学期が始まれば、生徒は寮で起居する生活になる。
しばらく家族と離れることになるので、寮で暮らせるよう入学前に整えていても、入学式の日の前の夜は寮に泊まらずに、自宅や別の場所に宿泊して登校する生徒も多い。

入学式の日には、新一年生は家族と登校することが多いので、いつもの通学路とは雰囲気が違う。地方から来ている人と帝都民とがはっきり見分けられるのが、ちょっと面白い。

帝都城公園北側、学校施設の多い側に植樹されている桜は、新入生を祝うように華やかに咲いている。

「ここの桜は、今が開花期なんだね。やっぱり北側だから、遅いのかな」

はらはらと舞い落ちる薄紅の花びらを、眩しそうに見上げる蒼司朗に、清志朗は微笑む。

「南と北なら、南のほうが暖かいから同じ木でも開花が早いみたいだけど、帝都の桜は、場所ごとに開花期の違う種類の木が植えられてるんだ。帝都城公園北側の桜は、入学式時分に咲くんだよ」

やはり入学式には、桜の花がなければ。こだわりは、新入生やその関係者だけでなく、新学期を迎える在校生にも嬉しい。

「ミギャギャ」

「キュイキュイ」

「チュピピ」

「「（しゅー）」」

「お花見は、この前しただろ？　今日はダメだよ」

ひらひらと舞い散る桜の花にはしゃぐピヨ四神を、こっそり可愛がって、蒼司朗は清志朗と肩を並べて帝都学園高等部に向かう。

校門には『帝都学園高等部入学式』の立て看板が出ていて、来賓受付の卓があり、生徒会役員の手で新入生の胸に花のバッジがつけられている。

（あれ……？）

違和感に眉を顰めた蒼司朗は、もう一度見つめて、その理由に気づく。

（そうか、もう蔵田先輩はいないんだ）

蔵田実親は卒業してしまった。三学期の途中から、生徒会は新役員に交代したのに、春休みの間に蒼司朗はそれを忘れてしまっていたようだ。蔵田実親は寮もとっくに出ていて、蒼司朗はそれもよく知っていたのに。

（登校初日に校門で見た印象が強かったのかな）

「蒼くん？」

歩く速度が落ちた蒼司朗に、清志朗は振り向く。
同時に、ピヨ四神も前肢や手羽で、蒼司朗にタッチした。
「なんでもない！」
ちょっとした変化にも気を配ってくれる清志朗とピヨ四神に、にこっと蒼司朗は笑う。
今日は入学式。新入生を迎え入れる日だ。今日から帝都学園高等部の、新しい一年が始まる。
（切り換えていかなくちゃ！）
思い出は、胸の奥に大切にしまっておけばいい。

歩きだそうとした蒼司朗の背中に向かって――――。

「見ィつけたァー!!」

微妙に変な発音で、大きな声が聞こえたと思った次の瞬間、背後から回された腕が、がしいっと蒼司朗を拘束した。

「うわっ！」
「ミギャギャギャギャギャ！」
「キュオキュオキュオ！」
「ピーピーピー！」
「「（しゃーしゃーしゃー！）」」
蒼司朗が仰天するのと同じく、蒼司朗にくっついていたピヨ四神も驚いて、ギャーギャー騒いだ。ピヨ四神の声は相当うるさいのだが、結界の保護領域ではないので、霊力のない者にはピヨ四神の姿は見えず、声も聞こえない。

「昨日と同じ、長いノ持ってルから、スグ見つけられたヨ！」

蒼司朗を背後から両腕で拘束したのは、帝都学園高等部の制服を着た、大柄な少年だ。
小柄な蒼司朗は登校する生徒に隠れてしまい、姿は見えなくなるが、いつでも持っている枝打ち斧は、いい目印になる。

蒼司朗の隣にいた清志朗も、突然のことに驚く。

「君は……、新入生？」
編入生がいるのなら、清志朗は知らされているはずだが、そんな話はなかった。
新しい帝都学園高等部の制服を着て、今日登校するのは新入生だ。身長は見上げるほど高いが、帝都学園高等部の生徒に身長制限はない。

「ちょっ……！」
ぎゅっと拘束されている蒼司朗は、相手の腕を振り解こうとするのだが、びくとも動かない。

「大騒ぎを禁ズル、疾く手を離セ」
「スミマセン、どうも」
「クァー！」
大柄な少年の同行者らしい幼い子供と青年が、蒼司朗を拘束する少年を注意し、詫びた。
奇妙な鳴き声を発したのは、子供を背に乗せている、ものすごく大きな鳥だ。

登校する新入生たちは、大騒ぎしている蒼司朗たちを避けるように、校門に向かってい

る。こんな場所で騒々しくするのは、よくない。

「……ミギュ」

鳥に乗っている子供の視線がまっすぐ向けられていることに気づいて、ピヨ四神は口を噤んで慌てて引っこんだ。

大柄な少年に抱えられたまま、一緒に少し振り向く形になった蒼司朗は、鳥に乗っている子供と青年を見た。大きな鳥と青年は初めて見るけれど。

「――――あれ、君……」

鳥に乗っているのは、昨日、商店街で立っていた子供だ。

青年は優雅な物腰で、蒼司朗にお辞儀する。

「昨日は、那智が大変お世話になりました。満足にお礼も申し上げられずに、失礼いたしました」

「かたじけナイ」

「クァー！」

子供も蒼司朗に礼を言う。

堅苦しい言葉遣いの子供に、蒼司朗から話を聞いていた清志朗も、ひょっとしたらと思い出す。

蒼司朗は子供に恩を感じさせることなく速やかに走り去ったが、蒼司朗が子供を人通りの多い商店街の中から少し広い場所に移動させて、同行者が来るまでさりげなく一緒にいてくれたのだということは、少し考えればわかる。

「昨日、制服着てタから、今日会えルと思ってたヨ！」

ぎゅうぎゅうと蒼司朗を拘束しながら、にこっと笑ったのは、昨日蒼司朗が大学生ぐらいだろうかと思った男だ。いきなり抱きつかれて驚いたが、子供に昨日していた抱擁と同じだと思い出す。

「お、まえ、新入生……!?」

「ハイ」

人懐こい笑みで頷いて、大きな新入生は、蒼司朗を抱えたまま清志朗にお辞儀する。

「新入生デ留学生の『望威』でス。ヨロシクお願いしまス」

「僕は望月清志朗、そっちは従兄弟の」



「望月蒼司朗だ！」

放せと暴れながら、蒼司朗は名乗る。

蒼司朗は取りこみ中のようなので、青年は清志朗に、恭しくカードを差しだした。

「帝都よりずっと西にあります、砂の国から来ました。私は『入谷』、こちらは『那智』と申します。そしてこの駝鳥は、『オラオラ』。帝都南地区に、この春より店を開きました。近くを通りかかられましたなら、ぜひお立ち寄りください」

オラオラに嘴で後頭部をつつかれて、望威はようやく蒼司朗を放す。

「ボクが店長ネ」

「ってことは、やっぱ年上なわけ？」

外国から来た留学生で新一年生なら、帝都の学生の常識から外れているかもしれない。訊ねた蒼司朗に、望威は笑った。

「いいえ、他の皆ト同じネ！　十月が誕生日で、十六歳になるヨ」

「えっ……」

三十センチは身長差のある大きな新入生を見上げて、蒼司朗は息を呑む。

どうりで言動が幼かったわけだ。中身は子供だと考えれば、合点がいく。

「砂の国というと……宝石ですか？」
カードに書かれていた帝都の地図や店名だけではよくわからなかった清志朗は、思い当たったことを訊ねる。
砂の国はオアシスを中心とした都市が点在するところで、宝石の交易地としても知られている。
望威と入谷は、嬉しそうに微笑む。
「そう、宝石ネ」
「砂の国でも、私どものおりましたところは、様々な種類の石が集まります、とてもよい交易地でした。お店には、質のよいものを揃えておりますよ。帝都では珍しいお品も、たくさんございます」
「――――遅れるゾ」
「クァー！」
嬉々として話す望威と入谷を静かに見つめて、那智が言った。

立ち話している間に登校していた生徒はかなり数が減り、新入生たちは受付を済ませて講堂に向かっている。

冷静に那智に指摘されて、入谷と望威は慌てる。

「これはいけない、坊ちゃま！」

「ウム！」

大きく頷いた望威は、お気に入りのヌイグルミでも抱っこするように、蒼司朗の身体に腕を回した。

「ちょっ、こらっ！」

身長差のせいで持ち上がってしまい、足が地面につかない蒼司朗は、ばたばたと暴れるが、やはりびくともしない。

「それでは、センパ、イっ!?」

蒼司朗を抱えたまま、清志朗に向かって、にっこり微笑んだ望威が、突然がくっと前のめりになった。前に向かって転倒しかけ、望威の腕が緩む。

この隙を逃さず、蒼司朗は望威から離れる。

「こんな場所でぐずぐずしてんじゃねーよ……！　一年坊主が」

四神の戦士、白虎の篠原勇輝が、図体のデカイ新入生の背中に蹴りを入れていた。

「篠原……」

（って、寝起きかよ！）

蒼司朗は渋い顔になる。

めちゃめちゃ機嫌が悪い様子の篠原勇輝は、さっき起きたばかりだとわかる半目だ。

「坊ちゃまー！」

背中にくっきり靴跡をつけてしゃがみこんだ望威に、入谷が悲鳴をあげる。

予想もしない無体に、望威はびっくりして振り返る。

「とっとと受付すませろ、ボケ」

望威を蹴り倒した篠原勇輝は、けっと息を吐き捨てる。

スラックスにシャツインせず、学生服のボタンは留めず前を開けたまま、ポケットに両手を突っこんでいる姿は、まさしく。

「不良ナリ」
子供は恐れ知らずだ。
ずばっと言いきった那智に、蒼司朗たちはぎょっとする。
（今まで誰も面と向かって言わなかったことを……！）

成績は上位だし、宿題や提出物はきちんとしているし、友達思いで面倒見よく、忘れ物もなく真面目。遅刻や欠席早退もないのだが、篠原勇輝の場合、見た目と態度に大いに問題がある。ガンを飛ばしながら、肩で風を切って歩く姿は、はっきり言って怖い。一見、がっつり不良である。

しかし、どう見えようと、篠原勇輝は帝都の由緒正しい四神神社、白虎神社の子息で、帝都を守護する白虎の戦士だ。神聖な戦士の一人で、毎日の平和と安全に貢献している帝都の有名人なので、感謝とともに皆から一目置かれている。

態度が喧嘩腰でも、篠原勇輝が本当に誰かに喧嘩を吹っかけていることは滅多にない。篠原勇輝の一見粗暴な様子もひとつの個性と考え、帝都では温かく見守ってくれているので、とくに問題にはならない。

不良みたいだと皆思っていたが、篠原勇輝本人を目の前にして、そう言い放てる者はい

なかった。

ゆらっと動いた篠原勇輝は、蒼司朗の襟首を摑んだ。

「テメーもぐずぐずすんじゃねぇ……！　行くぞ、清志朗」

寝起きで面倒くさいのか、篠原勇輝は子供の暴言をスルーするようだ。ついでに、初めて見ただろう駝鳥もスルーである。

清志朗を促し、蒼司朗を引きずりながら校門に入ろうとする篠原勇輝に、望威は叫ぶ。

「蒼司朗クンも受付ヲ……！」

蒼司朗の襟首を摑んだまま、篠原勇輝は不機嫌顔で振り返る。

「俺ら二年は、受付しなくていいんだよ……！」

「ニネン？」

きょとんとした顔で目を瞬く望威に、清志朗は頷く。

「蒼くんは、僕たちと同じ二年生だよ」

学生服の襟に入っているラインは、学年を示す二本。

望威は両手で頭を抱えて叫んだ。

「あんなにちっちゃくて可愛いのニー!!」

「う、うるせー！　ちっさい言うなっ！」

怒鳴り返す姿も、キャンキャンとよく吠える愛玩系小型犬を思わせる蒼司朗に、入谷はにっこり微笑む。

「坊ちゃまは小さいものがとてもお好きなんです」

厳かに断言され、がっくりと蒼司朗は両肩を落とした。

4

「……じゅうがつでじゅうろくさい……じゅうがつで……」

篠原勇輝に襟首を摑まれ、引きずられて講堂に入った蒼司朗は、在校生席のブロックの一番前の列に座っても、二つ折り状態のまま立ち直れずにいた。

身長が低い蒼司朗は、そのことで馬鹿にされることがよくある。身長さえ高ければ、蒼司朗の悩みはなくなるのだ。だから蒼司朗は背が高くなりたい。

蒼司朗の背が低いことを、望威のように大歓迎する者はこれまでいなかった。

欠点を美点と見てもらえるのはありがたいが、それを受け入れてしまうと蒼司朗のこれまで積み重ねてきた努力や葛藤、苦悩はなんだったのだろうということになる。

蒼司朗は絶対に、今のこの背の低い自分を歓迎することはできない。しかし、誰かに全面的に肯定してもらいたいという気持ちも、胸の奥にあった。だからといって、年下の少

年（しかもとても背が高い）に、可愛いと気に入られるのは論外だ。
複雑なお年頃である。

「……じゅうがつでじゅうろくさい……じゅうがつで……」
「うるせー、チビ」
辛気くさいし、いい加減うっとうしくなって、脚を投げだしてふんぞりかえる格好で隣に座っていた篠原勇輝は、黙れとばかりに蒼司朗の椅子を蹴る。
がくんと身体を揺らした蒼司朗は、うるうるに目を潤ませて顔を上げ、篠原勇輝を見上げる。
「し～の～は～ら～……、砂の国の人間て、何食べてんだ？　何食べたら、あんなデカくなれるんだ？」
今にも涙と鼻水が零れ落ちそうな様子の蒼司朗に、ぎょっと篠原勇輝は身を退く。
「し、知るかよ、そんなこと！　そういうのは、アレだ、清志朗に聞け！　清志朗に！」
学年代表の役員として忙しく動いていて、まだ席に着いていなかった清志朗は、たまたま前を通りかかったときに名前を出されてしまって困る。
「いや、僕だって、知らないよ」

「きよちゃぁぁん……」

くるっと振り向いたうるうるの蒼司朗に、清志朗も思わずのけ反る。

「落ち着いて、蒼くん。背が高かったのは望威くんだけで、入谷さんは普通だったよ？望威くんだけが、特別なんだよ、きっと」

帝都の人間と砂の国の人間は、人種が同じだ。生活環境の違いで砂の国の人間が長身揃いという話は、残念ながら聞かない。砂の国や、その近隣から輸入されている家具なども、帝都で使われているものと大きさは変わらない。使用者の体格が、同じくらいだからだろう。

「だったらオメー、あの一年坊主に聞きゃいいんじゃね？」

篠原勇輝は提案する。これで、さくっと問題解決だ。

「それは絶対にヤ！」

頬を膨らませ、ぷいっと蒼司朗は横を向く。

（うわー……、蒼くん）

幼い子供の頃の拗ね方を久しぶりに見て、清志朗はなんとも甘酸っぱい気分になる。

まさかそんな態度に出られるとは思っていなかった篠原勇輝は、蒼司朗のガキっちい様子にカチンとくる。

「ヤ、ってテメー……、テメーが砂の国のことぉ知りたいんだろうが！」
「おはよう。今年の一年生には、砂の国からの留学生がいるらしいね」
くすくすと笑いながら、若様が篠原勇輝の隣の席に座った。
「おはようございます、若様！」
一転して上機嫌になり、篠原勇輝は投げだしていた脚を引き寄せ、背筋を伸ばしてきちんと座り直す。
「おはようございます」
清志朗は若様に挨拶して、急ぎ足で用事を済ませに行く。
「お、はようございます……」
みっともない顔をしているという自覚のある蒼司朗は、若様に顔を向けられず、俯いたまま挨拶する。
「――――ミギャ」
「キュイ」
「チュピッ」
「「（しゅー）」」
那智に見つかって隠れていたピヨ四神は、いそいそと出てきて若様に挨拶する。那智は

離れた別のところにいるし、周りにいる一般生徒にピヨ四神の姿は見えない。
「おはようございます、奥庭の四神様。――朝から少しお疲れですか？」
ピヨ四神を見た若様は、おやと小首を傾げた。篠原勇輝は苦笑する。
「蒼司朗が、その留学生のデカイ一年坊主に気に入られたみたいで、面倒くさいことになってたんですよ」

ピヨ四神は若い可愛いお嬢さんは大好きだが、大きな男は怖い。たとえ蒼司朗より年下でも、図体が大きければ敬遠対象だ。
敵意や害意があれば、ピヨ四神は相手を懲らしめられるが、蒼司朗が迷惑していても、悪気のない無邪気な行動に出る相手には天罰を下せない。

お疲れの様子のピヨ四神に、どうにかしたほうがいいかと篠原勇輝は思う。
「蒼司朗、四神様の水は？」
帝都神社で汲ませてもらう清浄な清水は、ピヨ四神を元気にする。
「持ってるけど、ちょっと待って……」
みっともない顔をどうにかしようと、ハンカチで顔を擦っている蒼司朗には、ポケット

の中の小さな竹筒水筒を出す余裕がない。

「ちっ、使えねぇヤツ。いいよ、もう……！」

篠原勇輝はピヨ四神が元気になるよう、清浄な気の塊を五つ作って、ピヨ四神へとゆっくり飛ばした。

きらきら光る小さな光は、霊力のない者には見えない、特殊なものだ。

「ミギャギャ」

「キュイキュイ」

「チュピチュピ」

「「（しゅーしゅー）」」

ふわふわと飛んできた光を、ピヨ四神は、あーんと口を開けて待ち受けた。

ぱっくん♡　うまうま♪

清浄な気を補給して、機嫌がよくなったピヨ四神に、若様もほっと頬を緩める。

若様が講堂に到着したのなら、入学式は間もなく始まる。

「砂の国では、馬のように乗り物にできる、駝鳥という大きな鳥を飼っているようだね。受付のところで、駝鳥をどこに置くかで揉めていたようだ」

（駝鳥……）

蒼司朗と篠原勇輝は、那智という名の子供が乗っていた大きな鳥を思い出す。

篠原勇輝はぼりぼりと頭を掻く。

「……あれは、ねぇ……」

乗用のペットである。厩があればいいのだが、乗馬部に専用の馬場と厩舎があるのは、帝都大学だ。帝都学園高等部の乗馬部員は、帝都大学の乗馬部で部活を行っている。

「ちっせぇショベルカーと同じ扱いだよな」

「ちっさい言うな……！」

むむむっとむくれる蒼司朗は、ＮＧワードへの反応が過敏になっている。

新入生は講堂の前部、在校生は中部、保護者や関係者は後部にブロックを分けられ、椅子を支度されていた。来賓と教師は、左横に席を設けられている。

蒼司朗たちが在校生ブロックの最前列に座っているのは、その列に座るよう、指定され

ていたからだ。

ここに座るようにと席をきっちり決められているわけではないが、若様、白虎の戦士の篠原勇輝、そして帝都城奥庭のお庭番の蒼司朗は、最前列に座るよう、指定があった。二年生の学年代表である清志朗も、同じ列の指定だ。

新入生に贈る言葉は生徒会長が行うが、在校生であることから若様も壇上に上がり、新入生を歓迎する挨拶を行う。生徒会長と若様には、皆が配慮しあって、出入りしやすい席が空けられていた。

新入生のブロックも、新入生代表で挨拶する生徒には出入りしやすい席が指定されていたが、その他の席は自由だ。

クラス分けの発表は明日の新学期からなので、組別や出席番号順などで座ることもない。帝都在住で友人のいる者は集まって座っているし、地方から出てきた者は同郷者と一緒でも、緊張した面持ちで座っている。

講堂の舞台に一番近い前列に座る新一年生は、好奇心に溢れてその席を選んだ者か、後から来て、そこしか席が空いていなかった者だ。

駝鳥をどうするかでいくらか手間取ってしまったために、砂の国からの留学生とその関

係者は、一番最後に講堂に入ることになった。
講堂の後部ブロックにある保護者関係者席は、前列から埋まる傾向があったが、講堂の最前部である新入生席は、最前列しか空いていなかった。
最前列の真ん中近くにひとつ空いていた席が、望威の席になった。
新入生だけでなく、在校生教職員も含めても、望威は一番背が高いかもしれない。ただでさえ悪目立ちするその彼が、よりにもよって、あの席とは。

身長が高ければ、当然座高も高い。
頭ひとつ飛びでている望威は、座っているだけで講堂中の視線を集めてしまうだろう。
そして彼が壁になって前が見えない。
「……うざってぇな、ありゃ」
篠原勇輝は舌打ちし、遠慮のない物言いに、若様はくすくす笑う。
「脚だけは窮屈な思いをしないのではないかな」
椅子の列の間は、平均的な生徒の身長に合わせてある。望威が座ったなら、膝が前の椅子につっかえてしまうだろう。腰を下ろした格好のまま、身動きできないかもしれない。

くるっと後ろを振り返った望威は、きょろきょろと後ろのほうの席を見回す。
望威の後ろの席に座っていた新入生は、いきなり振り返られ、その距離の近さにものすごく居心地の悪い思いをする。望威と真っ正面から見つめ合うことになるので、まっすぐ前を向くのも憚られて、俯いてみたり、わざと視線を逸らすしかない。
図体のデカイ新入生は、そわそわと非常に落ち着きがなかった。

入谷と那智は、保護者関係者席の最後列に座っていた。
「あ、ほら那智くん、坊ちゃまが振り返ってますよ」
「見ればわかル」
冷めた対応をする那智と対照的に、入谷は嬉々として望威に手を振る。最後列で自分の後ろには誰もいないので、遠慮なく大振りだ。
しかし、望威は手を振り返すことなく、きょろきょろしている。
見てもらえなくても、入谷はくじけずに笑顔で手を振ったが、望威は全スルーだ。

「――――おーい、蒼司朗、あのデカイ一年坊主がオメーのこと探してんじゃねーの？」
「うるさい、こっち向くな！」

蒼司朗は頭を低くして、前のブロックの最後列に座っている新入生の陰に隠れる。
仕事を終えて急ぎ足で席に着いた清志朗は、苦笑する。
「枝打ち斧の目印がないから、見つけられないみたいだね」
いつも持ち歩いている蒼司朗の枝打ち斧は、邪魔にならないように前ブロックの椅子の後ろ、蒼司朗にとっては目の前になるところに寝かせて置いてある。
「入谷さんと那智くんは、一番後ろの列の左側に座ってたよ」
ちゃんと着席できたようだと、近くを通ったときに清志朗は見てきた。

教師や来賓が講堂に入って席に着き、扉が閉められる。
チャイムが鳴って、入学式が始まった。
司会進行の指示に従って、蒼司朗たちは起立や礼、着席をしたり、校歌斉唱をする。

校長先生から新入生に贈る言葉のときや、新入生代表の挨拶のときにも、望威は時々くるっと振り返り、きょろきょろした。動ける位置にいた若い体育教官は、望威を注意しようと思うのだが、自分が腰を上げるより先に、望威が振り向くのをやめて前を向いてしまうので、なかなか注意できない。

「……なんつーか、お預けくらってる大型犬みたいだな」
なんとも情けない顔で望威が振り向くので、やれやれと篠原勇輝は息を吐く。
望威の後ろの席の新入生や、振り向く姿が視界に入る生徒が、とにかく気の毒だ。
「――――蒼くん……」
望威に視線を辿られないように、清志朗は前を向いたまま、どうにかならないものだろうかと、蒼司朗に声をかける。
「オレ知らないし！　オレが悪いんじゃないし！」
望威が振り向くたびに、さっと身を屈めている蒼司朗は、断固として関わりたくない。
ちょっと情けをかけたなら、調子に乗りそうなので、絶対に相手をしたくない。
マナー違反なのは、望威なのだ。

「イリヤ、我に鞄ヲ」
「え？　あぁ、はい。どうぞ」
振り向く望威に付き合いよく手を振りながら、入谷は膝に乗せていた鞄を那智に渡す。
那智は鞄を開け、その中に手を突っこみ、拳大のものをひとつ摑みだすと、すっくと

椅子の上に立った。
大きく振りかぶって、投げる！

キラン！
恐ろしい勢いで飛んだそれは、振り向いていた望威の額に、ごつっと鈍い音を立てて激突した。
重い衝撃に、望威が吹っ飛ぶ。

壇上で新入生にお祝いの言葉を贈っていた生徒会長は、すぐ目の前でひっくり返った望威に驚き、声を詰まらせる。
どのタイミングで注意しようかと、身構えながら考えていた体育教官が、姿勢を低くして望威に駆け寄る。
教師に助け起こされた望威に、怪我はないようだとわかり、生徒会長は咳払いして気を取り直し、お祝いの言葉を続ける。

若様は、ぱちぱちと瞬きする。

「……今のは、なんだ？」
「銀色の、ボールですかね」
「ミギャ」
「キュウ？」
「ピッピ、チュピ」
「「（しゅーしゅー）」」
「オレ、オニギリかと思った」
アルミホイルに包んだ、早弁用に寮の食堂でご飯をもらって作るときに、よく見かける形のオニギリ。
「篠原くん、蒼くん……、よく見えたね」
何かが飛んで望威にぶつかったらしいとしかわからなかった清志朗は、飛来した物体を判別できた篠原勇輝と蒼司朗に感心する。素晴らしい動体視力だ。
「清ちゃん、砂の国の人ってお米食べるのかな？」
オニギリならば、ご飯がなければ作れない。
「お米は砂の国の人も食べるらしいけど……」
清志朗は言葉を濁し、篠原勇輝は蒼司朗の言葉に眉を顰める。



「俺も形と色でそうかとは思ったけど、あの激突音はねぇだろ……！」
まるで硬球か石のよう。
「だよなぁ」
蒼司朗はまったくそのとおりだと頷く。
「じゃあ、あの鳥の卵とか」
卵の殻なら硬そうだ。
「銀ピカの卵かよ」
「あの大きな鳥の卵なら、もっと大きいのではないかな？」
篠原勇輝が指摘する色はスルーして、ではさっきのあれはなんだろうと真剣に考える若様に、清志朗は教える。
「生徒会長の言葉、もうすぐ終わります」
贈る言葉の練習に立ち会っていた清志朗は、内容を覚えている。
次に壇上に上がるのは若様だ。
「あぁ、すまない」
こんなことを考えている場合ではなかったと、若様は意識を切り換えた。

入谷は望威を撃墜した那智を、呆然と見つめる。
「那智……」
つんと服を引っ張っても、那智は入谷に見向きもしない。
椅子の上に仁王立ちしたまま、講堂の最前部を睨むように見つめていた那智は、望威を助け起こした体育教官と一瞬視線を合わせ、恭しく頭を下げた。
実力行使で望威を止めた小さな子供に、体育教官は会釈し返した。
額を真っ赤にした望威は、銀色のものを握って座り直す。
今度はきょろきょろせず、お行儀よくしてくれたので、近くに座っていて望威に視界を塞がれている新入生たちは、とりあえずほっとする。
椅子から下りて座り直した那智から鞄を返され、入谷は溜め息を吐く。
「いけませんよ、オニギリを投げるなんて」
「すまヌ」
偉そうに那智は入谷に詫びる。
入谷は那智と望威の行動を思い起こした。

「あぁ、坊ちゃまはお腹が空いていたのですね」
オニギリを入手したあとは、おとなしくなっている。
なるほどと納得した入谷だが、那智は前を向いたまま、何も言わなかった。

「（保健室に行かなくて、大丈夫かい？）」
体育教官は小声で言って、真っ赤になっている望威の額を、痛々しそうに見つめる。これは、冷やしたほうがいいかもしれない。
気遣ってもらった望威は、じんじんする痛みで涙目になりながらも、にこっと体育教官に笑う。
「（オニギリをぶつけテ保健室に行ったら、先生ニ笑われるヨ。コレって『豆腐の角に頭ぶつけテ』と同じネ）」
その言葉をここで持ちだすのは、どうかと思うが。
「（……そう、だね。何かあったら、遠慮なく呼びたまえ。近くにいるから。我慢しないようにね）」
本人が保健室に行かなくてもいいと判断したのなら、たぶん大丈夫なのだろう。
式典の妨げにならないように、体育教官は姿勢を低くして自分の席に戻った。

座高の高い壁は最前列真ん中あたりに立ちはだかって視界を塞いでいたが、落ち着かないきょろきょろが終わって、静かになった。

入学式は滞りなく厳かに進行し、予定していた時間に終了した。

講堂からの退場は、紅白饅頭を受け取った新入生の列ごとに、生徒会長の先導で。来賓は横にある別の出口から。

講堂の外では、パフォーマンスを見せながら部活の新入生勧誘が行われる。

「講堂の出口のトコで、あのデカイ一年坊主、オメーのこと待ち構えてんじゃねーの？」

お気楽に予想する篠原勇輝に、蒼司朗はむっとする。

「面白がってんじゃねーよ……！」

「ごめんね、蒼くん、僕はまだ学校でやらなくちゃいけないことがあるから、一緒に帰れないよ」

（僕がいても、あまり役に立たない気もするんだけど……）

すまなそうに詫びる清志朗に、蒼司朗は微笑む。

「ありがとう、清ちゃん。心配かけてごめん。オレ、大丈夫だから。一人でなんとかできるよ。オレにはほら、奥庭の四神様もついてるし！」

さっきはギャーギャー騒いで隠れてしまったピヨ四神である。まったくあてにはできないが。

「ミギャギャ」

「キュイキュイ」

「チュピッ」

「「（しゅーしゅー）」」

蒼司朗が指でちょいちょいと撫でて可愛がると、タイミングよく鳴いてくれた。

蒼司朗ががっしりと拘束されていたところは見ていないが、入学式が始まっても何度も振り向いて探していた様子から、望威が蒼司朗に執着しているらしいことは、なんとなく若様にもわかった。

先に着席していた蒼司朗の様子もおかしかったので、講堂に入る前に何かあったのだろうと窺える。

お庭番が気分を害しているのは、奥庭の四神様にとってもよくない。

「講堂から出るだけなら、僕についてくるといい」
若様は蒼司朗に誘いかける。
若様は一般生徒が利用する出入り口ではなく、来賓用の出入り口を使う。
「奥庭の四神様が一緒だから、特別だぞ……！」
勘違いしていい気になるなと、篠原勇輝は蒼司朗を睨む。
「わかってるよ……！」
蒼司朗は篠原勇輝に言い返して、若様に頭を下げる。
「すみません、ありがたくお言葉に甘えます」
「ミギャギャギャ」
「キュイキュイ」
「ピピピピ」
「「（しゅーしゅー）」」
若様ともう少し一緒にいられるとわかって、ピヨ四神は大喜びした。

5

「助かりました。ありがとうございます」
若様の退出に便乗して講堂を出た蒼司朗は、若様に頭を下げた。
若様はこれから来賓との用事がある。若様のお付きのお務めがあるので、篠原勇輝ともここでお別れだ。

「望月蒼司朗、来客用の門を使うといい」
「オメーそんな目印持って歩いてんだから、校門使うと見つかるぞ」

いつも使っている校門に向かうには、新入生や在校生、入学式に出席した新入生の関係者でごった返している中を通っていかなくてはならない。
大勢の人間がいても、頭ひとつ背の高い望威は見つけやすいだろうが、背の低い蒼司朗

は前にいる者が壁になって視界を塞がれてしまう。離れていれば望威を見つけられても、近づくにつれて蒼司朗は望威の居場所がわからなくなる。

枝打ち斧は蒼司朗の居場所を知らせる、素晴らしい目印だ。横にして持てば蒼司朗の頭の高さより低くなるが、人が多い中で、枝打ち斧を横にして運ぶと邪魔になるので、縦にしなければならない。

蒼司朗はこっそり望威を見つけ、避けて校門に向かうつもりでも、枝打ち斧が見つかって、望威に飛びかかられる危険がある。

「来客用の門……」

来客用の門なんて使うことがないので、蒼司朗はそんなものがあることをすっかり忘れていた。その門が使えるなら、とても助かる。

「すみません、今日だけ、甘えさせてもらいます」

蒼司朗は若様に感謝して、大きく身体を折るようにお辞儀する。

「講堂から連れだしてくれた若様のお気遣いを、一ミリも無駄にすんなよ！」

指を突きつけて怖い顔で言う篠原勇輝に、蒼司朗は胸を張ってきっぱり言い返す。

「帝都でこのオレほど、一ミリの大切さを知ってる奴はいない！」
至言である。

若様は蒼司朗にくっついているピヨ四神に微笑みかける。
「ごきげんよう、四神様」
「ミギュン」
「キュイ」
「チュピピ」
「「（しゅー）」」
ピヨ四神は甘えた声で鳴いて、若様に愛想を振りまいた。

「じゃ、行こうか」
若様たちと別れた蒼司朗は、生徒の目に触れないよう講堂をぐるっと回って、登下校で生徒が使わない来客用の門に向かう。
クラブ勧誘とパフォーマンスが行われているのは、講堂と校門の間だ。来客用の門は、方角が違うので利用者の姿は校門から見えない。

来客用の門の側には生徒がいないので、静かだ。
（綺麗に手入れされてる）
別の造園業者が仕事をした庭園を抜け、石畳の道を通り、蒼司朗は来客用の門に行く。
来客用の門は利用者がいるときにだけ、内と外の門番の警備員によって開けられる。
門の前に立っていた二人の門番は、来客用の門に向かってやってくる蒼司朗の姿を見つけると、顔を見合わせて頷きあい、外にいる門番に小窓を開けて声をかけ、速やかに左右に退いた。
「お疲れ様でした」
「どうぞお通りください」
門を開き、門番は蒼司朗に向かって恭しく頭を下げる。
笑いを噛み殺しているような、気の毒がっているような門番たちの表情から、『今朝の校門前のお庭番、望月蒼司朗』に関する情報が伝わっているのだとわかり、蒼司朗は赤くなって顔を伏せる。
「さようなら」
「ミギャギャ」

「キュオキュオ」
「ピッチュチュピ」
「「（しゅー）」」

門番を務めているのは、公儀隠密の柳生一族の者たちだ。厳しい修業を積み重ねてきた公儀隠密たちには、ピヨ四神が顔を出してくれればその愛らしい姿が見える。

きょろんと顔を出し、蒼司朗と同じように挨拶しながら門を出ていくピヨ四神に、門番たちの頬は綻んだ。

（今日は午後から武闘訓練！）

帝都学園高等部を出た蒼司朗は、意識を切り換えて、帝都神社に向かって走る。

今日も夜まで蒼司朗は忙しい。

講堂の外に出た望威は、後から出てくる者たちの邪魔にならないよう、扉の横のほうに移動した。

新入生は、学生服の胸に花のバッジをつけているのでよくわかる。一際背の高い新一年生を発見した運動部の部員たちは、にわかに色めき立つ。

「おい、あいつ、背が高いな……！」
「噂になってた留学生だろう？」
「何かスポーツやってたのかな？」
「体験入部に誘うぞ！」
「ぜひ、うちの部に！」
体格に恵まれた新入生は、きっと運動部の戦力になる。向き不向きもあるだろうが、まずはなんでも体験してもらってからだ。
生徒が押し寄せて身動きが取れなくならないように、クラブ勧誘を行うのは、講堂の外、五メートルのところから、校門の十メートル手前までという決まりがある。
声をかけても新入生があまり興味を見せず、困っているのに、どこまでもつきまとうことも、校則で禁止されている。熱心に勧誘するのはいいが、節度はわきまえなければならない。
講堂の扉を出てすぐに足を止めた望威がいつ動くだろうかと、部員たちは他の新入生を勧誘しながら待っていたが、なかなか動かない。
（くそー、あともうちょっとこっちに……！）

（バスケ部の奴ら、狙ってるな。彼はぜひ陸上部に迎えたいぞ）
（水泳部で新記録を作ってくれ！）
（彼は拳闘部で、学生チャンピオンになれる！）
虎視眈々と機会を窺っている上級生たちには、緊張感が漲っている。

「坊ちゃま、お待たせしました」
先に講堂を出て、警備員室に預けていた駝鳥を引き取っていた入谷は、講堂の扉の横にいた望威を見つけ、笑顔で近寄る。
「クラブ活動の勧誘をご覧になられますか？　それとも今日はこのままお店に戻られますか？」
「蒼司朗センパイ……、早ク出てこないかナ」
望威は扉から出てくる上級生をじっと見つめる。
駝鳥に乗った那智は、やれやれと溜め息を吐いた。
「執着する下厭われン」
那智の言うことはもっともなのだが。
「モウ一回、抱っこしたいナ」

こんな感じで……、と望威は自分の身体に腕を回し、ぎゅーっとして、ぐふふふと笑った。

（うっ!?）

（まさか、変態!?）

勧誘できる領域に足を踏みだしたなら、スタートダッシュをかけようと、望威の様子を窺っていた上級生たちは、意味ありげなポーズで不気味な笑いを発されて怯んだ。

（男色家の多い異国から来たんじゃないだろうな!?）

男子校でこれはキツイ。しかも帝都は地方から集まってきた可愛いお嬢さんがたくさんいる、ステキな場所なのだ。わざわざ男同士でくっつかなくてもいい。そっち方面が趣味の者と接触するのは嫌だ。

数人の二年生のあと、講堂から出てきた生徒会役員が、講堂の扉を閉めて施錠する。

蒼司朗が出てくるのを待っていた望威は、きょとんと目を瞬く。

「アノ……」

声をかけられ、生徒会長は望威に振り向く。

「講堂の中に忘れものかい？」

望威は目立つので、かなり前に講堂を出たはずだと、生徒会長はよく覚えていた。まだこんな場所にいるなんて。

忘れものを取りに戻ったのかと訊ねた生徒会長に、望威は首を横に振る。

「イエ、あの、まだ中にいる人ニ……」

「？　中にはもう誰もいないよ？　先生に用事なら、職員室に行きたまえ。先生たちは別の出口を使って出られたんだ」

教職員は、若様が使った別の出口から講堂を出た。ここで待っていても、出てこなくて当然だ。

「あ、イエ、そうではないでス」

「そう？　何か気になることや困ったことがあったら、いつでも遠慮なく訪ねてくれたまえ。東館二階の生徒会役員室に来てくれれば、誰かがいるから」

「ありがとうございまス」

扉を引いて施錠を確認して、生徒会長は生徒会役員室に戻っていった。

施錠された講堂の扉を、望威は呆然と見つめる。

（出タ……？）

絶対見落とさない自信があったのに……！

「オォオォォ!!」

「クァーッ！」

大ショックと、大げさなポーズで嘆いた望威に、オラオラが遠吠えするように鳴いた。

突然の奇声に、クラブ活動に新入生を勧誘していた上級生や、部活のパフォーマンスを見たり話を聞いていた新入生が、びくっと肩を震わせる。

「逃げタ」

簡潔な言葉で、那智は望威の心の傷をざっくりと抉る。

鮮やかな逃走に、入谷は感心した。

「坊ちゃまから逃げきるとは、なかなかやりますね」

「うゥ……」

がっくりと肩を落とした望威に、那智は言う。

「日中用事があろうトモ、夜に八寮に戻るナリ」

帝都学園は全寮制だ。
望威は、しゃっきりと顔を上げた。
蒼司朗がいないのなら、ここにはもうなんの用もない。
「帰ル」
望威は那智の後ろに乗る。
「諾」
那智はオラオラの手綱を握った。
「クァー！」
ぶわっと翼を広げて威嚇しながら、雄叫びをあげる駝鳥の姿に、クラブ活動の勧誘をしていた生徒たちが、恐れをなした。
モーゼが海を割ったように、人波が動いて、ざっと校門までの道が開いた。

高校生であり宝飾品店の店長である望威は、基本、学校に行ってないときには、店長としての仕事をしなければならない。
夕食時になれば蒼司朗は寮に戻るだろうと、望威は楽しみにして、開店記念セールの仕事を終わらせ、いそいそと寮に戻った。

しかし、談話室や自習室、食堂を覗いても、蒼司朗の姿はない。
所在なさげにうろうろしている望威の姿に、夕飯をとるために同室の寮長と食堂に下りてきた生徒会長が気づく。
「どうしたんだい？　食事をとりたまえ。それとも、食べられないものが今日の献立に出ていたのかな？」
「い、イエ、そんなことはナイでス。大丈夫、食べられまス。帝都ノ料理、勉強してからきましタ」
「そう。偉いね。じゃあ、早く入って。それとも、具合が悪いのかい？」
「イエ、そうではないですガ……」
連れられて食堂に入り、望威は生徒会長たちがするのと同じように、配膳カウンターで料理のトレイをもらう。
「あの、蒼司朗センパイは……」
やはり食堂にはいないようだと、きょろきょろ見回しながら席に着いた望威に、生徒会長は言う。
「二年の望月蒼司朗くんは、いろいろと忙しいからね。この時間にいないなら、今日は別のところで夕飯を食べてくるのではないかな？」

この時間になっても食堂に姿が見えないのならば、今日の夕飯は断っていたのだろう。
食堂を見回した寮長は、二年生、清志朗の友人たちのグループを見つける。
「清志朗くんもいないようだね」
「一緒にいるかどうかまではわからないだろう？」
「あぁ、それもそうか」
清志朗も夕飯を断っていたようだが、まだ寮に戻らない二人が一緒かどうかまでは、生徒会長たちにはわからない。
寮監の教師には、どんな用事で外出しているか、二人とも報告しているだろう。寮内での生活に何か影響があるような事態でもないかぎり、寮監の教師から寮長に、不在の生徒に関する連絡が行くことはない。
「彼らには、よくあることだよ」
なんでもないことのように、生徒会長は締めくくった。
夕飯時分には寮に戻るだろうと望威は思っていたのに、そうではなかったらしい。
「オォオォオォ!!」
頭を抱えて嘆いた望威に、食堂にいた生徒たちは、びくっとした。

夕食を終えた望威は、蒼司朗の帰りを待つために、玄関にしゃがみこんだ。
その、なんとなく切ない姿を見て、入学式やクラブ活動の勧誘に参加しなかった上級生が、どうしたのだろうかと気にする。
「……落ち着かないのかな」
「ずっとあそこにいるね」
異国から来た留学生だ。生活環境が違うので、戸惑っているのかもしれない。
「もう少し様子見て、寮長に知らせよう」

一年生の人数が奇数だったので、今年の部屋割では、留学生の望威は一人部屋だ。望威には店長の仕事があるので、学校に通うだけの生徒とは、いくらか生活時間がずれるかもしれない。一人部屋のほうが、同室者に気を遣わなくていいので楽なのだが、そこまで詳しく知っている寮生はまだほとんどいない。
同じく新一年生で、寮生活が初めての生徒が、なんとなく望威を見過ごせず、集まって顔を見合わせる。
四月初旬の帝都の夜は冷える。玄関にいて、風邪をひいては大変だ。

「どうしよう？」
「お風呂に誘おうか」
「身体が冷えたままだと、眠れないよね」
「うん、気分転換にもなるよ」
親切な一年生が、望威に声をかけようとしたとき、玄関の扉が外から開けられた。

「ただいまー」
「戻りました」
枝打ち斧を持った蒼司朗と清志朗が寮に帰ってきた。

がばっと立ち上がった望威は、蒼司朗に飛びかかる。
「蒼司朗センパイ～!!」
「ピー！」
「うぉっ!?」
チビ朱雀が警告を発する真正面からの突撃に、身の危険を感じた蒼司朗は、素晴らしい反射神経で飛び退く。

「〜〜〜!!」
叫びの余韻を残して、望威は玄関の扉を押し開けて外に転がりでていった。

「……今のは……？」
一瞬のことに、何が起こったのかわからなかった清志朗は、目を瞬く。蒼司朗は肩で息をしながら、胸を押さえる。
「っぶねー……！」
「ギュココココ」
「キュオー」
「ピルルルルル」
「「(しゅーしゅー)」」
迷惑そうにピヨ四神も、口々に何かを訴えた。
とにかく、いきなりがぶり寄られてはたまったものではない。

望威のことを近くで気にしていた一年生たちは、一転した望威の元気溌剌さに、呆然とする。

とりあえず、玄関で蒼司朗を待っていたらしいことはよくわかった。
「……行こうか」
「うん」
気にする必要はないらしいと、そっと一年生たちは退散した。

玄関から転がりでた望威は、恐ろしい速さで戻ってきた。
「蒼司朗センパイ、酷(ひど)イぃー!!」
「いきなり飛びかかろうとした奴が文句(もんく)言うな！」
スキンシップ過多(かた)に懐(なつ)こうとする望威を、蒼司朗は邪険(じゃけん)に振り払う。

「ミギャミギャミギャ！」
「キュオキュオキュイ！」
「ピッチュチュピピッチュピチュピチュ！」
「「(しゃーしゃーしゃー！)」」
うるさいほどに鳴いて、ピヨ四神も威嚇しているようなのだが、残念ながら望威にはピヨ四神の姿が見えず、声も聞こえないので、まったく効果がない。

蒼司朗に邪険にされながら、望威はにこにこと楽しそうに笑う。
「怒ってるセンパイも可愛いネ！」
「可愛い言うな！」

自室に向かって廊下を歩きながら、飛び退くように望威から距離をとった蒼司朗の学生服の胸元から、ペンダントにして身につけていた『緑の石』がはみでた。
きらり、と光った『緑の石』に、はっと望威は目を瞠る。

「蒼司朗センパイ、その石――」
「一年生はここまでだよ」
清志朗は笑顔で、望威を止める。

他学年の部屋のある場所に、無闇と足を踏み入れてはならない。
帝都学園高等部学生寮の、暗黙のルールである。

一見物静かで優しそうでも、清志朗は甘い少年ではない。
「ハイ、すみません」
譲歩の余地のない様子を見て、望威はおとなしく引き下がる。
蒼司朗は、清志朗の言うことを聞いた望威ににこっと微笑む。
「んじゃ、おやすみ。何か困ったことがあったら、我慢しないで……」
「アリガトウ、蒼司朗センパイ！」
感激する望威に構わず、蒼司朗は言葉を続ける。
「早めに近くにいる奴捕まえて、なんとかしろよ？」



6

「ミゴゴゴゴゴゴ」
「キュウゥー」
「ピルルルルルルル」
「「(しゃーしゃーしゃー)」」
部屋に戻っても、ピヨ四神はまだ望威への不機嫌全開だ。
「あぁ、もうわかったから、機嫌直せ……！」
枝打ち斧をいつもの位置に立てかけた蒼司朗は、ピヨ四神を自分のベッドの上に下ろし、ちょいちょいと可愛がる。
「今日は入学式で、おめでたい日だったんだ。だから、今夜だけ特別。な？」
蒼司朗はもらった紅白饅頭の包みを開けて、ピヨ四神の前に置く。
「もう夜だし、全部食べると多いから、オレと半分こ」

蒼司朗は箱から赤い饅頭を取り、包み紙を広げて敷き紙にして、饅頭を食べやすいように小さく割って置いてやる。
「取り合いしないで仲良く食べるんだぞ」
「ミギャ」
「キュイ」
「チュピッ」
「「（しゅーしゅー）」」
食べ物で一気に機嫌がよくなって、ピヨ四神は小さく分けられた赤い饅頭に食いついた。
ピヨ四神が喉を詰めないように、蒼司朗は饅頭の近くに水皿を支度し、帝都神社でもらってきた清水を注いでおく。

霊力がなくてピヨ四神の姿は見えなくても、蒼司朗の様子で、おおよその見当はつく。
「蒼くん、赤いの半分こしよう」
にこっと微笑んで、清志朗は紅白饅頭の包みを取りだした。
「清ちゃんも食べてなかったんだ？」
「うん、タイミング合わなくてね」

蒼司朗は帝都神社での神官修行の帰りだが、清志朗は望月造園の見習い庭師として働いてきた帰りだ。

蒼司朗は帝都神社で神官たちと一緒に、清志朗は自宅である望月造園で家族と住み込みの若い庭師たちと、夕飯を食べて寮に戻った。二人が一緒に寮に帰ったのは、たまたま途中で会ったからだ。

赤と白、やや小ぶりの饅頭は、大勢で分けて食べられるほどの量はなく、だからといって一人で食べるには、人目を憚る量だ。講堂でもらったものを持ったまま出かけて、帰るまで開ける機会がなかった。

今日も一日、それぞれがんばってきた蒼司朗と清志朗は、夜のお茶の時間にひと息つく。たまには、こんなふうにお茶菓子のある夜もいい。

「明日の始業式は、朝礼があって、クラス発表と教科書、時間割表の配布、それだけかな。午前中には終わるけど、明後日からは平常授業で、六時間授業が始まるから、遅くならないようにね」

饅頭を食べ終わって、学生服から寝間着替わりのスエットに着替えながら、清志朗は言う。

「蒼くんはなんでもがんばりすぎるから、心配になるよ」
「うーん、努力家とか、そういうのじゃなくて、人並みにやろうとしてるだけなんだけどなぁ」
（うまくできないから、やらなきゃいけないだけなんだ）
足掻いているのを、努力家ととられるのは、違う気がする。
「次も清ちゃんと同じクラスになれたらいいな」
この半年で、学校生活にもかなり慣れたし、友達もできたが、やはり教室の中に頼りになる従兄弟の存在があるのとないのとでは、全然違う。
ちょっぴり不安を見せる蒼司朗に、清志朗は微笑む。
「たぶん同じクラスだよ。終業式の前の日のＳＨＲで、アンケートに記入しただろう？」
「あぁ、そう言えば」
そんなアンケートもあったなと、蒼司朗は思い出す。
同じクラスになりたい者と、なりたくない者。家が犬猿の仲だとか、宗教上のことだとか、性格が合わないとか、生理的にダメだとか、その他個人的に色々な理由がある。

帝都学園高等部は全寮制なので、四六時中同じ者たちと顔を合わせることになるから、できるだけ円満に学生生活を送るには、余計な諍いの種はないほうがいい。

「寮の部屋は、寮生の希望で決められるけど、クラス分けはアンケートを元にして学校側で振り分けるんだ。違うほうがいいって希望を出していたら、別のクラスに振り分けてもらえるけどね」

「オレは清ちゃんとずっと一緒がいい」

「うん、僕もそう書いた」

蒼司朗と清志朗は、にこっと笑いあう。

お互い一人っ子で、ただ一人の従兄弟だ。これまで厳手と帝都に離れていて、せっかく一緒に暮らせるようになったのだから、できるだけ一緒にいたい。

考えていることは同じだ。

蒼司朗は早朝から奥庭の庭仕事、清志朗は望月造園で見習いの仕事。二人とも始業前から、忙しい。

「ほーら、皆、寝るぞー」

先に用済みになった饅頭の敷き紙と水皿を退けてから、寝間着のスエットに着替えた蒼司朗はベッドに上がる。

「ミゴ？」

「キュー……」

「……ピー」

「「……」」

白虎だけが、ちらっと目を開けたが、饅頭を食べてお腹の膨れたピヨ四神は、すっかりおねむの状態だった。

「落っこちるなよ？」

蒼司朗はピヨ四神をベッドの端から真ん中のほうに移動させ、布団に入る。ピヨ四神は目を閉じたまま、もぞもぞと動いて、蒼司朗のほうに近寄った。

小さな四神様は、ふくふくとあったかくて柔らかい。そして甘い匂いがする。幸せな気分で、蒼司朗はくすっと笑う。

（明日もがんばろうな）

清志朗が部屋の明かりを消す。

「おやすみ、蒼くん」
「おやすみ、清ちゃん」
二人の部屋の消灯時間は、他の部屋よりずっと早い。

ここまでと言われた位置で、部屋に戻る蒼司朗と清志朗が見えなくなるまで見送った望威は、自分の部屋に戻る。
（あの石……）
部屋に戻る途中で誰かに声をかけられたような気がするが、よく覚えていない。自分の部屋に入った望威は、ドキドキする胸を押さえながら、閉めた扉に背を預けて、ずるずると座りこむ。
「……緑ノ石ダ……、間違いナイ……。やっと見つけタ……！」
望威は幼い頃から多くの石を見てきた。ちらりと見えただけだが、はっきりわかる。あれは、ただの石ではない――――！

望威が店長を務める宝飾品店では、開店セールのひとつとして、デザインの古くなった宝飾品を鑑定し、その価値に見合う最新のデザインの宝飾品と交換するサービスを行って

いた。来店した客は、不足分を支払えば、もっと高価な宝飾品を購入することもできる。
開店セール期間中は、手入れを怠った宝飾品を預かって綺麗に磨いたり、不要になった宝飾品の出張買い取りも行っている。
引き出しの奥深くに眠ったままの宝飾品も、ちょっとした働きかけによって、表に出てくることがある。
持ち主がその本当の価値を知らないまま、しまいこまれている石がある。
砂の国から訪れた望威たちが、帝都に宝飾品店を開いた目的は、『不思議な力を秘めた色石』を見つけだすこと。

「フ……」
顔を伏せた望威は、肩を震わせる。
（最高ダ、蒼司朗センパイ。ちっちゃくて可愛くて、ボクの欲しイものを、なんでも持ってル）
「フフ……」
零れた笑みは、次第に哄笑へと変わる。
「フハハハハハハハ…!!」

入浴を終えて、ちょうど望威の部屋の前を通りかかった生徒が、びくっと怯えて、足早に自分の部屋に戻った。

翌朝、早起きした望威は、食堂が開くのを待ち構えて、一番乗りで食堂に行った。

帝都学園高等部の寮では、朝晩の食事も健康管理のひとつと考えていて、栄養管理された献立が供されている。食べ盛りの高校生男子が、朝食抜きで登校することはまずない。

「ちっちゃいのに、たくさん食べそうですネ」

蒼司朗が食事をする姿を想像して、望威はくすくすと笑う。

楽しく一緒に朝食をとって、一緒に登校……しようと思っていたのだが。

来ない。

「早く食べて登校しないと、遅刻するよ？」

食堂に入った筧俊彦は、まだ食事をした様子のない大柄な一年生に声をかける。

筧俊彦と一緒に来て、一足先に配膳カウンターに行った熊谷融は、振り向いて言う。

「君で最後だよ、取りにおいで」

食事は人数分しか支度されない。
「ボクで、最後？」
望威はきょとんとして目を瞬く。
「でもアノ、蒼司朗センパイと清志朗センパイがまだ来テません」
動く様子がないので、埒があかないかもと判断して、筧俊彦は一年生の分も朝食のトレイを持ってきてやる。
「望月くんたちは、もう出かけたよ。朝は仕事してから登校するんだ。朝ご飯も、そっちで食べるんだって」
「ハ？」
待っていても来ないわけだ。
「オォオォオ!!」
頭を抱えて嘆いた望威に、トレイを置いて同じ卓に着こうかと思っていた筧俊彦と熊谷融は、びくっとして自分たちのトレイを持って別の卓に移動した。
「（な、なんか変わった一年生だね）」
「（留学生だよな、あいつ）」
言っては悪いが、蒼司朗たちは面倒くさそうな一年生に気に入られたような感じだ。

食べ終わった食器を返却台に運ぶ途中の斉藤正則が、筧俊彦の横で足を止める。

「(昨日から噂になってる)」

小声で言われ、筧俊彦と熊谷融は、やっぱりそうかと思う。

「(学校に行きながら教えるよ)」

入学式の日に登校しなかった寮生は、昨日の夕方や夜に郷里から帝都に戻ってきた者がほとんどだ。留学してきた新入生について、まだ何も知らない者が多いのだが、昨日の夜に寮に戻っても、斉藤正則は情報通だ。

筧俊彦と熊谷融は、斉藤正則を待たせないよう、急いで朝食をとる。

食堂で朝食をとっていて、望威の声にびくっとした生徒は、そちらを見ないようにして何も聞こえなかったふりをし、さくさくと食事を終わらせる。

「……ハー……」

望威は朝からがっくりと肩を落とし、寮を出る。

「坊ちゃま、おはようございます」

「迎エなり」
「クァー！」
寮の玄関を出たところに、入谷と駝鳥に乗った那智がいた。

寮の玄関を出て、初めて駝鳥（乗用）を見た生徒は、ぎょっとして、できるだけ駝鳥連れの一行から遠いところを通って、学校に向かう。

「おはよウ……」
寝起きはいいほうなのに、朝からだるだるのやる気のない様子で出てきた望威に、入谷は首を傾げる。
「坊ちゃまお一人ですか？　蒼司朗様はいかがなさいました？　まだ出ていらっしゃらないようですが」

いつ望威が寮を出るのかわからなかったので、入谷は朝食開始の時間から判断して、玄関の外で待機していた。
蒼司朗の姿はまだ見ていない。あれだけ気に入っていたのに、望威が蒼司朗を置いて出

てくるとは考えられない。朝からしつこくしすぎて、先に外に出ていろと叱られたのだろうか。

「昨日の夕食はいかがでしたか？　蒼司朗様とご一緒できましたか？」

にこにこと訊ねられ、さらにがっくりと望威は顔を伏せる。

「昨夜モ今朝モ、一緒できなかったヨ」

「は？」

入谷はまさかと耳を疑う。

「粘着質で気に入ったものには執着しまくる迷惑ストーカー体質の坊ちゃまが、ご一緒できなかった!?」

何気に失礼てんこ盛りの入谷だが、望威は慣れているのか気にしない。

「デ、もう学校に行っタって……」

やる気なくなっちゃったとばかりに、望威はその場にしゃがみこむ。

「遅刻するゾ」

「とりあえず、坊ちゃま、学校に行きましょう」

問答無用で入谷は自分より大きな坊ちゃまを荷物のように担ぎ上げ、駝鳥に乗る那智の

後ろに乗せた。
「うーん……」
望威はお人形でも抱っこするように、那智を抱き締める。
「はい、出発」
「クァー！」
ひと声雄叫びをあげて、周りにいる者たちをびびらせ、入谷に轡を取られたオラオラは、ドッドッドッと歩きだす。
珍妙なものに向ける目で遠巻きに眺められながら、望威は駝鳥の上で那智に懐きつつ快調なペースで登校する。
駝鳥の背に揺られ、那智を抱っこしていくらか落ち着いた望威は、顔を上げ、入谷と那智に言う。
「――――『緑ノ石』を見つけたヨ。蒼司朗センパイが持ってタ」
「えっ……」
入谷は驚いて望威に振り向く。
「そんな、なんでもかんでも坊ちゃま好みの、都合のいい展開なんて……！」

「あったネ、それガ」
ふふんと望威は自慢げな顔をする。
「何色でもいいと思っていたケド、まさかこんなに早ク見つかるとは思わなかったヨ」
校門の近くで足を止めた駝鳥から、望威はひらりと降りる。
「譲ってくれるよウ、交渉を始めるヨ。調査を頼ム」
交渉術は情報が多いほうが有利だ。望威は蒼司朗のことをまだ何も知らない。
商人の顔になった望威に、入谷は恭しくお辞儀する。
「かしこまりました、坊ちゃま」

7

クラス分けは、生徒用玄関の前の掲示板に学年ごとに貼りだされる。
帝都神社の社務所で朝食をとった蒼司朗と清志朗は、登校して早速、人垣ができているクラス発表を見にいく。
「うわー……、清ちゃん、お願い」
身長の低い蒼司朗は、前にいる者が壁になってまったく見えない。
「うん、ちょっと待ってね」
毎年のことなので、清志朗は慣れた様子で、すっすっと生徒たちの間に入っていった。
蒼司朗は邪魔にならないよう、後ろに下がって待つ。
「ミギャ？」
胸元から顔を出したチビ白虎が、円らな瞳で蒼司朗を見上げる。
どうかしたのかと、問いかけるような視線に、蒼司朗は微笑む。

「……うん、やっぱり、背は高いほうがいいなーってね。贅沢な悩みだけどさ」

事故に遭って入院し、怪我を治療しながらリハビリを始めた頃には、立って歩けるかどうかもわからなかった。こうして誰の手を煩わせることもなく普通に生活できるだけでも、十分に幸せだ。身長が低いことなんて、いろんな不自由に比べたら、全然たいしたことじゃない。

「当たり前になると、幸せって見えなくなっちゃうな」

きゅんきゅんと懐くピヨ四神を、蒼司朗は人目につかないよう、指先でちょいちょいと撫でて可愛がる。

人間でも動物でも、自分が好きだから、頼んだからといって、好いてもらえるわけではない。努力してどうにかなるものでもない。

「自分の意思で決められないことって、多いね」

望んで誰かが便宜を図ってくれることは、家庭や学校の一部にすぎないことを、身動きならない身体で独りになって、蒼司朗は痛感した。社会に出ていくには、まだまだ力不足であることも、痛いほど自覚している。

クラス発表は名字の五十音順。望月は、だいたい後半部分に並ぶ名前なので、各クラスの後半部分だけ見れば、どのクラスになったのかがわかる。

「――――二組だよ。同じクラスだ」

ピンポイントで、連番になって掲示されている自分たちの名前だけ探してきた清志朗は、発表を見ている生徒たちの中からさっさと出てきた。

「すぐ朝礼だから、このまま校庭に行こう。同じクラスの人は、同じ列に並ぶし、教室に入ればわかるよ」

「うん」

帝都っ子の清志朗は、穏やかな性格なので、のんびりしているような印象があるが、けっこう短気だ。

クラス発表を見るために、ごちゃごちゃと人が多いところで、ぐずぐずしているよりも、校庭に集まってきた者を待つ。教室に置いてくるような鞄もなかったので、校庭に直行だ。

校庭にはちらほらと生徒が集まっていて、仲のいい者たちで話をしていたり、ふざけ合ったりしている。

元気が有り余っている年代だが、さすがに帝都の一流高校に進学する、それなりの家柄

の頭脳明晰な少年たちは、何をしていても品がよく優雅で知的だ。元気が有り余って、羽目を外しているような少年はいない。

皆優雅なのだが、一際優雅に見えるところがある。

「――――若様、おはようございます」

清志朗に続けて、蒼司朗も若様に挨拶する。

「おはようございます！」

（昨日も会ったのに、やっぱ緊張するなぁ……！）

一人色違いの白い学生服を着ている若様は、美姫である母君似の、眩しい相貌の美少年だ。金糸のような見事な金髪に、透きとおる碧眼は、絵本に描かれる御伽噺の王子様そのもので、姿がちらりと見えるだけでも、幸せな気分になり、その日一日いいことがありそうに思える。

若様は蒼司朗たちの声に振り向く。

「やぁ、おはよう」

「ミギャミギャ」

「キュイキュイ」

「チュピチュピ」

「「（しゅー）」」

振り向いた若様に、蒼司朗にくっついているピヨ四神が嬉しそうに鳴いた。今日も元気一杯のピヨ四神に若様も嬉しくなって微笑む。

「おはようございます、奥庭の四神様」

ふわりと花が咲きこぼれるように微笑まれて、ピヨ四神は恥ずかしくなって小さく鳴きながら顔を引っこめた。

「ミ」

「キュ」

「ピ」

「「（しゅー）」」

引っこんだくせに、ちらっと覗いて、鳴く。

ピヨ四神の愛らしい仕種に、若様はくすくす笑うが、蒼司朗は呆れる。

「呼びたいなら、隠れるなよ」

ちゃんと顔を見せればいいのにと、近づけた蒼司朗の人指し指に、チビ白虎はぱく、と食いつく。ちゅーちゅー。

「こらー、吸うな！」

「蒼くんの指は、美味しいみたいだね」

姿は見えないが、その光景が見えるようで、清志朗は笑った。

チビ白虎が蒼司朗の指を機嫌よくしゃぶっている姿が実際に見えている若様は、なんとも愛らしい様子に、たまらず肩を震わせ、口元を隠して横を向く。

「なんだ？　お前たちも二組か？」

若様と一緒にいた篠原勇輝が、蒼司朗を見て嫌そうな顔をする。

きゅぽっと、しゃぶられていた指を取り返して、蒼司朗は篠原勇輝を挑戦的に見上げる。

「体育の時間だけじゃなくて、残念だったな」

「これから一年間、よろしく」

篠原勇輝に向かって憎まれ口を叩く蒼司朗の横で、清志朗はくすくすと笑った。

『これより朝礼を行います。全校生徒は、速やかに校庭に出て、クラスごとに整列してください』

身長の並び順が決まるのは、保健体育の最初の授業のときに行う身体測定のあとなので、

今日の朝礼では適当な順に好きなように並ぶ。
いつでも一番身長が低かった蒼司朗は、つい習慣で一番前に行ってから、はっとする。
（若様がいるんだ……！）
いい加減な順番でいいといっても、若様の前に立つのは、おこがましいだろう。
最前列なら、今持っている枝打ち斧を、自分からよく見える朝礼台の足元に置いておこうと思っていたのだが――――。
「よい。望月蒼司朗、僕の前にいてくれ」
若様は蒼司朗の肩にそっと手を当てて、そのまま自分の前に立っているように促す。
「でも……」
「奥庭の四神様を後ろにやるわけにはいかない」
「ピ」
蒼司朗の頭の上で、チビ朱雀が若様のほうを向いて鳴いた。
帝都学園高等部に登校した望威は、昨日の入学式の終わりに聞いていたとおりに、まずクラス分けの掲示を見て、自分のクラスを確認し、ついでに二年生の掲示も見にいく。
背が高いので、望威の場合は前に行かなくても掲示物が見える。

（蒼司朗センパイは……）

探そうとしたところで、横から声をかけられた。

「一年生のは向こうだよ。ここは二年」

「見つからなかったのかい？」

ちょっと変わったところのある大柄な留学生の新一年生に対し、帝都学園高等部の上級生は、皆親切だ。

全部見たのになかったのだろうかと、心配され、望威は答える。

「あ、イエ、大丈夫、ボクの名前、見つけましタ。四組でしタ」

言葉に被せるように、朝礼を告げる放送が流れた。

「クラスごとに並んで朝礼だよ。君は背が高いから、自分のクラスの一番後ろに並ぶのがいいかもしれないね」

「連れていってあげようか？」

「ありがとウ、大丈夫でス」

生徒が動いているから、教えられなくてもわかる。何組の列なのかは、声をかけて訊ねればいい。

望威は親切な二年生にお辞儀して別れ、生徒の移動の波に従って校庭に行く。

（蒼司朗センパイは……）
目印になる枝打ち斧を探すのだが、見つからない。
（んー……）
きょろきょろしていると、声をかけられた。
「望威くん、四組の列はこっちだよ」
「――――ありがとウ」
親切な同級生に呼ばれて、望威は自分のクラスの列の最後尾に並ぶ。
生徒の中で頭ひとつ飛びでる望威は、視界が広いのだが――――。
（いなイ……？）
目印を持っているだろう蒼司朗は見つからない。

朝礼が終わって、教室に入った蒼司朗は、名前の五十音順で指定されていた席に着く。
清志朗とは連番なので、前後の並びだ。
「三分の一くらいが、一年のときと同じだね」
ちょっとほっとした顔の蒼司朗に、清志朗は楽しそうに言う。

「体育祭に期待できそうな感じだよ。楽しみだな」
蒼司朗と若様は足が速いし、篠原勇輝は運動全般得意だ。他にも、運動部員の生徒がたくさんいる。
「望月、蒼司朗くん」
隣の席の少年に呼ばれて、蒼司朗は振り向く。短く髪を刈った、野球少年という雰囲気の少年は、振り向いた蒼司朗に、にこっと笑う。
「同じクラスになれて嬉しいよ。これからよろしく」
「うん、よろしく」
ちょっと驚きながら、蒼司朗は同じように返す。こんなふうに声をかけられるなんて、初めてだ。
「うわー、ほんとに小さい！」
ばたばたと近寄ってきた少年にいきなり言われて、蒼司朗は怒るより先にびっくりする。
「ミギュ」
「キュ」
「ピ」

「「（しゅー）」」

霊力がない者には姿は見えないのだが、近寄ってきた少年の勢いに驚いて、ピヨ四神は急いで隠れる。

「こら！　失礼だろ！　ごめんね、望月くん。あ、蒼司朗くんね」

後から来た少年が、先に来た少年を叱り、清志朗に笑いかける。清志朗とは以前同じクラスになったことがある者が多い。清志朗は頷く。

「うん、僕たち二人とも、名前で呼んでくれたほうがいいよね」

同じクラスに同じ名字の従兄弟だ。名前で呼び分けてくれたほうがいい。

蒼司朗を小さいと言った少年は、蒼司朗の机に手をつき、興奮した様子で言う。

「御前試合とか、追儺の鬼舞とか見たよ！　すごいな！　めちゃめちゃがんばってたよな！」

「僕ら、すごく感動したよ！」

「あ、それ、僕も見たよ！」

「うん、すごかったよね！」

「あ、りがとう……」

次々に集まってきた同級生に囲まれて、わいわいと話しかけられ、その勢いに蒼司朗は圧倒された。

チャイムが鳴って全員が席に着き、囲んでいた生徒がいなくなって、蒼司朗は肩に入っていた力を抜く。

（びっくりした……）

全体的にお行儀のいい同級生たちは、教師が入ってきてＨＲが始まると、そちらのほうに意識を切り換えた。

教科書と時間割表をもらい、連絡事項を聞いて、今日は終わりだ。部活のある者は、部室棟のほうに向かう。

また同級生に囲まれそうになった蒼司朗に、ポケットに両手を突っこんだ格好で、篠原勇輝が近寄る。

篠原勇輝は、がつっと蒼司朗の机の端に蹴りを入れる。やってることは乱暴そのものだが、机が動かない絶妙の力加減だ。

「オメー、今日も神官修行だよな？　ハンパやってっと、ぶっ飛ばすぞ……！」

ガンを飛ばす篠原勇輝を、立ち上がった蒼司朗は睨み返す。
「半端なことなら、最初からしない！　最後までしっかり見てろよ！」
しっかり言い返した蒼司朗から、ふんと篠原勇輝は目を逸らす。

「それでは、また明日。さようなら」
若様の涼やかな声に、蒼司朗と篠原勇輝の会話に緊張していた同級生たちは、はっとする。
「さようなら」
「さようなら、若様」
同じ寮で生活しているのだが、若様は談話室や食堂を利用することがなく、お城に戻っていることもある。
篠原勇輝は若様と一緒に教室を出ていった。

「僕たちも行こう。遅れるよ」
「うん」
蒼司朗は清志朗に促され、枝打ち斧と教科書の入った袋を持って教室を出る。

「またね、蒼司朗くん」
「またね」
「うん、またね」
にこやかに手を振られ、蒼司朗は笑って手を振り返した。

教室を出て、ほっとした様子の蒼司朗に、くすっと清志朗は笑う。
「驚いたみたいだね、蒼くん」
「うん……」
大勢から親しげに声をかけられるなんて、蒼司朗にとって初めてだ。
「これまでも、みんな、蒼くんに話しかけたかったんだ。だけど、蒼くんはいつもすごく忙しかったからね」
「そう、なんだ？」
「うん。蒼くんが気づいてないだけで、とてもたくさんの人が蒼くんのことを応援してるよ」
一生懸命な蒼司朗を邪魔したくなくて、声をかけるのを遠慮していた。同じクラスになって、今日はちょっと箍が外れた感じだ。

「みんなもっと蒼くんと話をして、蒼くんのことを知りたがってたみたいだけど、やっぱり時間がないから、篠原くんが助けてくれたね」

篠原勇輝が喧嘩を吹っかけるような怖い感じで絡んだので、蒼司朗に話しかけようとした少年たちは、圧倒されて思い止まった。

「あ……」

清志朗に言われて、蒼司朗は気づく。

篠原勇輝があんなふうに声をかけなければ、きっと蒼司朗は級友に取り囲まれて、動けなくなっていた。状況に慣れず、うまい切り上げ方がわからない蒼司朗は、ずるずると話に付き合ってしまう危険がある。

「あいつ、わかりにくい……」

「だけど、すごくいい子だよ」

「――――うん、知ってるよ」

篠原勇輝は白虎に認められ、四神変化できる少年だ。誰より優れているのに違いない。

ただその思いやりの表現方法は、些か乱暴だ。

快調に通常の学校生活も始まって、初日の授業を終えた蒼司朗は、教室を出て役員会に

行く清志朗と別れてから、あれ？　と何か忘れているような気分になる。蒼司朗の生活としては、何も不足せず、まったく普通なのだが――――。

「あ、あのデカイ一年生！」

何人もの上級生や友達から、望威が蒼司朗を探していたと、待っていたと聞いた。学校が同じなら、寮も同じだ。学年が違っているし、生活時間もずれているのだろうが、あの一年生とあれからまったく顔を合わせないのは妙だ。

「ひょっとして……、お前ら？」

「ミギュ」

目をやった瞬間に、ぴこっと耳が動いた白虎に、蒼司朗は溜め息を吐く。

「あのなぁ、気持ちはわかるけど、そういうのはやっちゃダメだ」

きっと神様権限で、神隠しのような目眩ましを仕掛けたのに違いない。ピヨ四神は見た目こそちびっちゃいが、そんなことなんて、きっと造作もない。

蒼司朗を困らせる者でも、排除してしまうのはよくない。

「解決しなきゃいけないことなら、オレがちゃんとなんとかするから」

「ミギュー」

「キュウ」

「ピチュ」
「「（しゅー）」」
不承不承（ふしょうぶしょう）といった様子で、ピヨ四神は蒼司朗に甘えた。
靴（くつ）を履（は）き替えようと蒼司朗が向かった生徒用玄関に、件（くだん）の新入生はいた。

8

連日さんざん擦れ違ったり待ちぼうけをした望威は、じっと見つめていた廊下を進んでくる小さな人影が、本物だとは信じられなかった。

（ついニ幻覚を見るようになりましたカ……）

溜め息を吐きつつも、望威は廊下の端にしゃがみこんだまま、小柄な人影を見つめる。

（幻でモ、いいヤ）

まったく会えないよりは――――。

「どうした？　気分でも悪いのか？」

近寄ってきた蒼司朗に覗きこまれ、望威ははっとする。

「蒼司朗センパイ？」

「うん」

にこっと蒼司朗は笑う。
幻ではないとわかって、望威の中でぷつっと何かが切れた。
「蒼司朗センパイィ！」
がばっと立ち上がった望威は、蒼司朗に飛びかかる。尻尾を振りながら飼い主に喜んで飛びつく、厄介な大型犬のようだ。悪気はないのだろうが、あまりに図体がでかすぎる。
「！」
来るかもしれないと予測していた蒼司朗は、枝打ち斧の柄を床について、棒高跳びでもするように、玄関ホールの高い天井に向かって、ひらりと身を躍らせた。
鮮やかに跳んだ蒼司朗の姿に、階段や廊下にいた生徒が、おぉと目を瞠る。目の前から消えた蒼司朗の姿を追った望威も、その綺麗な身のこなしに目を奪われた。
蒼司朗は、とんと軽やかに床に下りる。
「凄イ！」
素晴らしいものを見たと、感激した望威は蒼司朗に向かって両手を広げる。
片手で枝打ち斧をくるくると回した蒼司朗は、近寄ってくる望威の喉に向かって、柄の先を繰りだした。
習練を積んだとわかる、鮮やかな突きの動きで迫りきたものに、急制動をかけた望威は、

降参のポーズで両手を上げる。
激突するかと見えた柄の先は、絶妙なタイミングで少し引き戻され、望威の喉の前でぴたりと止まった。
「無闇やたらとくっつくな！」
「ハイ」
寸止めされた柄を見つめ、望威は裏返った声で返事をした。

蒼司朗と会えたことに大喜びして、一瞬頭の中から吹っ飛んでしまったが。
（ア、そうだ、石……）
望威は蒼司朗と会いたかった目的を思い出す。
枝打ち斧の柄を引いた蒼司朗に、望威は言う。
「蒼司朗センパイ、お願いがありまス。センパイのペンダントを、見せてくださイ」
「ペンダント？」
「ハイ」
望威は大きく頷く。
蒼司朗は襟元に手を入れて、首にかけている緑の石を取りだす。

「これのこと？」
きらりと輝いたそれに、望威は目を輝かせる。
「それでス！」
近寄ろうとする望威から、蒼司朗は慎重に距離を取る。
若くても、望威は交易国で生まれ育った、宝飾品店の店主だ。
「……見せるのはいいけれど、手渡すことはできないよ。価値がどうとかいうのも、聞きたくない。これはオレが親からもらった形見だから」
亡くなった父親から譲られた、蒼司朗が持つ『緑の石』は、望月家の家宝だ。
『緑の石』は、所有者に植物を活性化させる『緑の指』の力を与える不思議の石だ。宝石として見れば、まったく価値のない屑石かもしれないが、『緑の指』のことを知っていれば、希少価値のある特別な石になる。
どういう目で見られるにしろ、所有者の蒼司朗としては、面白くない。
（それにこれは、オレだけのものじゃない）
蒼司朗は所有者として、預かっているにすぎないと思っている。『緑の石』は、造園業を営む望月家のものだ。望月造園を継ぐ、清志朗と二人で受け継いでゆくものだ。赤の他

人に触れてほしくもない。

「それはボクの探しているものかもしれなイ！　ぜひ、譲ってくださイ！」

「悪いけど、それはできない」

きっぱりと答えて、蒼司朗は靴を履き替えに、下足ロッカーに向かう。

「オレに用って、それだけかな？」

訊ねられ、爽やかに望威は笑う。

「ぎゅーっと抱っこしテ、匂いを嗅ぎたいでス！」

「嗅ぐな！」

後をついてくる望威に、蒼司朗は振り返って怒鳴る。

「エー？　蒼司朗センパイ、甘くて美味しそうな匂いするヨ。赤ちゃんみたいネ」

ぴきっと蒼司朗のこめかみに青筋が浮いた。

背が低いので、小さいとはよく言われるが、赤ちゃんとは……！

甘い匂いがするのは、連れているピヨ四神のせいだろうとわかっているのだが。

「――――斬り落とす……！」

「わハ！」

目にぎらりと殺気を宿し、枝打ち斧の柄の先ではなく刃（安全のために袋が被せてある）のほうを向けた蒼司朗から、望威は急いで離れ、ロッカーの陰に隠れる。

「ミギャギャ」

「キュウ」

まあ落ち着け？　とばかりに、顔を出したチビ白虎に顎の下を前肢タッチされ、チビ青龍に襟首を鼻面ふんふんされて、蒼司朗は深呼吸する。

すーはーすーはー……。

（オレが育てるのは、穏やかで優しい四神様……！）

お世話係の蒼司朗は、自らピヨ四神のよいお手本とならなければいけない。

気を取り直して、蒼司朗は靴を履き替える。

「店に出るんだろう？　店長さん。お前も早く帰れよ」

店長と店員が若くて格好いい異国人である宝飾品店のことは、あちこちで評判になっていて、蒼司朗の耳にも届いている。

生徒用玄関を出ていく、蒼司朗の背中を見つめ、望威は静かに口を開く。

「――――その石を譲ってくれないト、帝都が大変なことになるヨ？　お庭番様」

「!?」

不穏な言葉に、蒼司朗はドキリとしたが。

（ここで止まったり、振り返ったりしちゃダメだ……！）

過敏に反応したなら、ちょっかいを出されてすぐにどうこうなってしまう、弱みを持っていることになる。はっきりと策があるわけではなく、探りを入れられているだけなら、ヒントを与えてはいけない。

（普通の人間に、どうこうできることなんて、たかがしれてる）

振り返ったり足を止めたりすることなく、蒼司朗は帝都学園高等部を出た。

平日の放課後、蒼司朗は神職の資格を取るために、帝都大学の国学科で勉強をしている。通信教育の学生を対象にした、帝都大学での面接学習だ。

帝都学園高等部から帝都大学に向かうには、帝都図書館の横を通っていく。

「ピ」



「あら？　蒼司朗くん」

頭の上のチビ朱雀が鳴き、名前を呼ばれて、蒼司朗はそちらに顔を向ける。

帝都図書館の一階に設けられたカフェのオープンスペースで優雅にお茶をしていたのは、髪を結い上げた、袴姿の芙蓉薫子だ。

帝都大学には制服はないので、何を着てもいいのだが、朱雀の戦士であり、帝都の有名人である芙蓉薫子は、記念写真の撮影にもいいような格好で通学することに決めたようだ。天候に影響されず動けるように、履物は草履ではなく、ショートブーツである。

帝都の有名人で、大美人の芙蓉薫子には、老若男女すべてにファンが多い。

近くでじろじろと姿を眺めるのは失礼だからと、やや離れた席を選ぶ者が多いので、ここでも芙蓉薫子の周りの卓はがら空きだ。

今も、少し離れた席でそれとなく芙蓉薫子を見ていた者たちが、知り合いを見つけて声をかけたらしい芙蓉薫子に、はっとする。

帝都学園高等部の制服を着た小柄な少年は、長い棒のようなものを持っていた。学生服姿では印象が違ったが、呼びかけた名前から、奥庭のお庭番をしている少年だとわかった。

カフェにいる他の客が小声で話している内容は聞こえないが、微笑ましく見ているのは、

表情からわかる。

「芙蓉先輩、こんにちは」

蒼司朗は芙蓉薫子に向かってお辞儀する。

「ミギュン」

「キュイ」

「チュピチュピ」

「「(しゅーしゅー)」」

顔を出したピヨ四神も、芙蓉薫子に向かって愛想をふりまく。

ピヨ四神の愛らしい様子に、くすっと芙蓉薫子は笑う。

「こんにちは。蒼司朗くんも、こちらでお茶いかが？」

嬉しいお誘いに、ピヨ四神は身を乗りだすが。

「ありがとうございます。でも、オレ、これから大学に行かなくちゃいけないんです。また次に機会があったら、ご一緒させてください」

蒼司朗はお誘いを辞退する。

言われて、芙蓉薫子は蒼司朗が放課後に帝都大学に通っていたことを思い出す。大学の

四時間目の授業が始まるまでには、まだもう少し、時間があるが。
「わたしもこれから学校に戻るところだったの。一緒に行きましょうか」
「え？」
思いがけない言葉に、蒼司朗は目を瞬く。
（そうか、大学生は、学校を出てもいいんだ）
登校しても、授業をとっている時間のないときには、大学生は学外に出てもいい。
芙蓉薫子は荷物をまとめて席を立つ。
「本を返してくるから、ちょっと待っててくれるかしら」
この図書館では、自習室だけでなく、併設のカフェに本を持ちこんで利用してもいい。
「ミギャミギャ」
「キュイキュイ」
「チュッピピチュ」
「（しゅー）」
「オレも一緒に行っていいですか？」
可愛いお姉さんが大好きなピヨ四神がねだるので、蒼司朗は芙蓉薫子に訊ねる。ピヨ四神の円らな瞳に見つめられ、芙蓉薫子はくすっと笑う。

「ええ、もちろん」
芙蓉薫子の抱えている本を見て、蒼司朗は四神の戦士の誰もが、勤勉で博識であることを思い出す。
（あ、そうだ……。芙蓉先輩なら、知ってるかもしれない）
「え、とあの、ちょっと知ってたら、教えてほしいことがあるんですけど……」
「まぁ、わたしに？　何かしら？」
にこりと芙蓉薫子は微笑む。
あまり大きな声で話すことではないかもしれない。
「あの、（砂の国の人のことって知ってますか？）」
小声で話すために蒼司朗が芙蓉薫子に近づくと、ピヨ四神は我先にと芙蓉薫子に飛びついた。
「ミギュギュン」
「キュイキュイ」
「ピピチュ」
「（しゅー）」
「あ、こら！」

「いいわ」

本を抱えた手の上や肩に乗ったピヨ四神に、きゅんきゅんと懐かれ、くすぐったくて芙蓉薫子はくすくす笑う。

蒼司朗はピヨ四神に口を尖らせる。

「芙蓉先輩の邪魔しちゃダメだぞ？」

ピヨ四神に真剣に言い聞かせる蒼司朗まで愛らしくて、くすくす笑いながら芙蓉薫子は図書館に入った。

「そうね、人種はわたしたちと同じで、オアシスのある場所に都市を築く、交易を中心とした民族だったのじゃないかしら。宝石の産出量が多いわね」

「商人が持ってる、帝都をどうにかするような『力』ってなんでしょう？」

「えぇ？　なぁに、それ？」

「オレの『緑の石』に目をつけた砂の国の宝石屋が、石を譲らないと帝都が大変なことになる、なんて脅しみたいなこと言ってきたんですけど。オレよくわかんなくて」

困惑している蒼司朗の言葉に、芙蓉薫子は考える。

「ちょっと嫌な感じね。蒼司朗くんの『緑の石』に目をつけたということは、それが不思議な力を持っている、特別な石だって、わかってるわけよね。ほかにもそういう力のある

石を持っているのかもしれないわね」
「オレが奥庭のお庭番だってことも知ってました」

高校生である蒼司朗が、帝都城のお庭番であり、望月造園の見習い庭師であることは、調べればすぐにわかる。帝都を守る神官としての修行もして、蒼司朗は各種催し物にも参加している、帝都の要人だということもわかるだろう。帝都城の奥庭が、帝都にとって重要な場所だということも、調べがつく。

「奥庭に悪さする馬鹿なら、それは自業自得だから放っておけばいいわね」
たとえ留守にしていても、奥庭は神の庭だ。本物の神様相手に、何かしようものなら、確実に祟られる。

図書館には、知り合いがいた。
「おや、蒼司朗クン」
カウンターで貸し出しの手続きをしていた蔵田実親が、芙蓉薫子と一緒に入ってきた蒼司朗を見つけた。蒼司朗は蔵田実親に会釈する。

「こんにちは、蔵田先輩」
蔵田実親は着物の下にシャツを着用した、書生スタイルだ。長身なので、羽織っているマントもなかなか決まっている。
「ミギャギャ」
「こんにちは、奥庭の四神様」
存在を主張するピヨ四神に、にこっと微笑んで、蔵田実親はピヨ四神に清浄な気を五つ飛ばした。
ふわふわと飛んできた光を、芙蓉薫子に甘えてくっついたまま、ピヨ四神は口を開けて待ち構え、ぱくんと食べる。
ご機嫌なピヨ四神に、くすっと笑い、蔵田実親は蒼司朗に教える。
「僕たちのほかにも、知り合いが来てるよ」
「げ、蒼司朗……！」
横手にあった、新刊の予約カウンターのほうから出てきたのは、篠原勇輝と若様だ。
「若様もこの図書館で本を借りられるんですか？」
意外だと驚く蒼司朗に、若様はにこりと微笑み、篠原勇輝はむっとする。
「若様や帝は、公費を大切に使われるんだよ！」

公人である帝や若様は、私的に使う小遣いも、すべて公費から出ている。
帝都民の血税である公費を浪費しないために、帝や若様はよほど気に入った本以外は、図書館で借りることにしている。帝や若様も手に取る本なので、帝都図書館を利用する者は、本をとても大切に利用する。

（あぁ、そう言えば……）
帝や若様は、自分で買い食いすることも滅多にない。食事として出されたものは、残さず食べる。好き嫌いしない。好きだとも、嫌いだとも言わない。言えない。常に公正であることを心がけて行動している。
（え？　でも、今、新刊の予約カウンターから出てきたよな？）
若様がどの作品がお気に入りだという話は聞かない。そして、自分が本を予約するために、篠原勇輝が若様を付き合わせるとは思えない。
ピヨ四神が芙蓉薫子にくっついていたので、ずかずかと蒼司朗に近寄った篠原勇輝は、遠慮なく蒼司朗の頭の上に手を置いて、ぐっと上から押す。
「（よそでぺらぺら喋りやがったら、承知しねぇぞ！）」

小声で脅しながら、押し潰すように力を加えられ、ようやく蒼司朗は理解する。
（そうか、篠原の名前で予約して借りるんだ）
帝や若様の名前が貸し出し記録に残らないように。

図書館は原則として、第三者への本の又貸しを禁止しているが、若様のお世話係の篠原勇輝は、白虎の戦士であり、社会的信用がある。
帝や若様に、記録を残さないようにして貸し出すこともできなくはないが、それをすると本の所在がわからなくなる可能性もある。図書館にあるはずの本がない、といううっかりミスにも繋がりかねない。
実在する誰かの名前を使ったなら、貸し出し記録は通常業務で処理できる。帝や若様のためという事情をわかっていて、ここでは篠原勇輝の行動は黙認されているのだ。
新刊本を一番最初に貸し出すのは、贅沢を律している帝と若様への、せめてものサービスだ。

「縮む！」
蒼司朗は篠原勇輝の手を振り払う。

「大きな声を出さないように」
口の前に人指し指を一本立てて、蔵田実親は蒼司朗を注意した。
芙蓉薫子は書架室の返却棚に、利用した本を置き、戻ってくる。
「それじゃ、行きましょうか」
「あぁ、蒼司朗クンは帝都大学でお勉強だね」
「途中まで一緒に行こう」
若様は蒼司朗に微笑む。いつもぺったんこの篠原勇輝の鞄は、帝都学園高等部を出たときより、少し厚みがあった。
今日もさようならと言って教室を出た若様は、寮ではなく帝都城に帰るのだ。帝が楽しみに待っている本を届けるために。
帝都城内堀にかかる橋は、西側、帝都神社に近い側にある。帝都図書館からは、帝都大学を通り過ぎた先だ。
「若様がお優しいからって、いい気になるなよ」

「わかってるよ」
睨み合いながら、蒼司朗と篠原勇輝は肩を並べて図書館を出る。
本人たちは険悪で仲の悪いつもりなのだろうが、傍目にはじゃれあっているようにしか見えない。

蒼司朗と篠原勇輝に続き、図書館を出た若様は、いくらも行かないうちに、ふらりと姿勢を崩した。
「ピー！」
「ミギャギャギャ！」
「キャオ！」
「（しゃーっ！）」
「若様!?」
「お気を確かに！」
ピヨ四神のただならない鳴き声と、芙蓉薫子の声、蔵田実親の呼びかけに、前を歩いていた蒼司朗と篠原勇輝はぎょっとして振り向く。

真っ青になり、ぐったりとした若様が、蔵田実親に抱えられていた。

「若っ!!」

篠原勇輝は若様の容体を確かめに近寄る。蒼司朗は呆然と立ちすくむ。

蒼司朗と篠原勇輝も、自分が見ているものが信じられない。

ついさっき、図書館の中にいたときには、とても元気そうだったのに――――。

「ミギャギャ！」

「キュイキュオ！」

「ピピチュ！」

「「（しゃー！）」」

ピヨ四神は緊張した声で鳴きながら、蒼司朗に飛びついた。

「いかがなさいましたか!?」

身を隠して若様の身辺警護をしていたのだろう、忍び装束に身を包んだ柳生真純が、どこからか現れた。ついさっきまで図書館の自習室にいた柳生蘭丸も、一瞬で蔵田実親の

すぐ横に移動した。

「近くに曲者の気配はありませんでしたが……！」

柳生蘭丸は勉強しながらも、若様を狙う怪しい者の気配がないか探っていた。若様に何か危害が加えられたとは思えなかったのだが、この状況はどうしたものだろうか。

ただならぬ事態を察し、近くで隠密活動の実習をしていた公儀隠密候補生たち五名が、蒼司朗たちを背で庇って取り囲む。

蔵田実親は慎重に若様を確かめるが、外傷らしきものはどこにもない。

芙蓉薫子は顔を上げて周りを見、形のいい眉を顰める。

「……瘴気が漂っているわ」

「馬鹿な！『更衣の祓い』が終わってから、いくらも経ってないぞ……！」

『更衣の祓い』の後に、『蟲呼びの夜』を行って、帝都は蟲の瘴気を綺麗に浄化した、はずだ。

しかし、穢れに弱い若様は、敏感に穢れに反応し、体調を崩す。四神の戦士が意識を研ぎ澄まさなければ感じ取れないほどの微細な穢れも、若様にとっては毒になる。



ここで感じ取れる瘴気が、最も濃いとは限らない。もっとずっと瘴気の濃い場所が帝都のどこかにあり、ここで感じられるのは、そこから漂い流れてきたほんの僅かなものかもしれない。

――その石を譲ってくれないト、帝都が大変なことになるヨ？　お庭番様。

声が耳に蘇り、蒼司朗はぎくりと身を硬くする。

「まさか、あいつ……！」

様子を変えて呟いた蒼司朗を、はっと芙蓉薫子は見つめる。

「蒼司朗くん、まさか……!?」

「何か知ってるのかい!?　キミたち」

「んーなこたぁ後だ！」

素早く四神変化し、白虎の戦士になった篠原勇輝は、蔵田実親の腕から奪い取るようにして、若様を抱え、地を蹴った。

若様は一刻も早く、穢れに侵されない神聖な結界領域である帝都城に運ばなくてはな

らない。白虎の戦士なら、誰より速く移動できる。

ぎゅっと枝打ち斧を握りしめ、蒼司朗は柳生真純たちに頼む。

「オレの学校の一年生、宝飾品店の店長をしてる留学生を探してください……！」

若様のことは篠原勇輝に任せておけば、きっと大丈夫だ。

お互いに素早く目配せしあった柳生真純たちは、速やかに八方に散った。

9

蒼司朗が学校を出てから、三十分近くが経っていた。身長の高い望威は悪目立ちする。なんらかの行動を起こしたのだから、きっともう近くにはいないだろう。

「新入生で宝飾品店の店長っていうと、今、噂になってる子ね」

まだ見たことはないが、芙蓉薫子には、友人や後輩から評判のイケメン情報が入る。

新規開店した宝飾品店には、異国から来たイケメン二人と可愛い坊やがいるらしい。

「その子が、蒼司朗くんを脅したのね」

「どういうことなのか、教えてくれるかい？」

蔵田実親は微笑んでいたが、目の奥は冷たく、笑ってなどいなかった。

「ミギャミギャミギャ！」

「キュイキュオキュオキュオ！」
「ピッチュチュチュチュピチュピ！」
「（しゃーしゃーしゃー！）」
ピヨ四神は興奮し、我先にと訴えるように、芙蓉薫子と蔵田実親に向かって鳴く。残念ながら、芙蓉薫子たちにもピヨ四神の言葉は通じない。
騒がれては話ができないので、蒼司朗はピヨ四神を撫でて宥める。
「オレの親の形見のペンダントの石に興味を持ったみたいで、さっき学校を出る前に、譲ってくれって言われたんで断ったんです。そうしたら、石を譲らないと、帝都が大変なことになるって、脅されました。あいつはオレがお庭番であることを知ってます」
口外無用とされたが、蒼司朗の『緑の石』のことは、ピヨ四神が以前、その力を使ったことから、小此木神官長や四神の戦士たちにはわかっている。
植物を活性化させる不思議な力を秘めた特別な石ではなくても、あの石は幼い頃に両親を亡くした蒼司朗にとって、大切な親の形見だ。譲ってくれと言われて、簡単に譲れるようなものではない。
望月家の次代を担う、蒼司朗と清志朗に託された家宝なのだ。蒼司朗の一存で、どうこ

うできるものではない。

「すみません、まさか、若様に悪影響が出るようなことをされるなんて、想像できませんでした……！」

唇をきつく噛み、蒼司朗は深く頭を下げる。

若様の御身に何かあったのなら、それは確かに帝都にとって大変なことだ――――！

帝や若様を守る奥庭の四神の世話係が、若様の身を危険に晒すなんて、絶対にあってはならない。

「こういうことをする人だから、蒼司朗くんは石を譲らなかったのよ。わかるかしら？譲らなくて正解なの。どんなものを手に入れるにも、縁があるのよ。その石は、来るべくして蒼司朗くんのところに来たの。石だって、人を選ぶんだから」

芙蓉薫子はきっぱりと言いきった。蔵田実親も、蒼司朗のとった行動を間違っていないと思う。

「その石は、悪用されてはいけないものだ」

心正しい人間が管理するべきものが、世の中にはある。
『緑の石』はそういうもののひとつだ。
「蒼司朗クンが持っていたまえ」

音もなく飛んできた式神が、芙蓉薫子と蔵田実親を見つけ、降下した。
「小此木神官長？」
二人はそれぞれに放たれた式神を受け取る。
式神は小此木神官長からの伝言を、二人に伝えた。
「――蒼司朗クン、これからすぐに帝都神社に行ってくれるかい？」
「大学での今日の授業は欠席なさいね」
「勉強なんてしてる場合じゃないです！」
蒼司朗は二人と別れて、帝都神社に向かう。

帝都神社では、神官を緊急招集し、蟲退治のための出撃準備をしていた。
折り返し蔵田実親が飛ばした式神で、帝都神社に蒼司朗が来ることを知らされていた小此木神官長は、社務所で蒼司朗を待っていた。

「帝都南公園で、濃い穢れが確認されました。ただちに浄化に向かいます！」

小此木神官長の言葉に、蒼司朗は息を呑む。

帝都南公園は、今日、望月造園が作業を行っている――――！

（清ちゃん、伯父さん……！）

「ミギャ！」

真っ青になり、がくがくと身を震わせた蒼司朗に、ピヨ四神は強い声で鳴く。

「キュオキュオ！」

「ピピピピ！」

「「（しゃーしゃー！）」」

ピヨ四神の声で、様子がおかしいことに気づいた小此木神官長は、蒼司朗の背後に立ち、大人の大きな手で、しっかりとその細い両肩を摑む。

「心配ありません。蒼司朗くんには、奥庭の四神様がついてます……！」

ピヨ四神は蒼司朗が大好きで、蒼司朗の大好きなものも大好きだ。蒼司朗が悲しむよう

なことは、絶対に阻止する。蒼司朗は、周りのものまで全部、ピヨ四神に護られている。

肉親を突然喪失した恐怖は、まだ蒼司朗の心に癒えない深い傷となって残っている。身を寄せた温もりで自分たちの存在を主張するピヨ四神と、蒼司朗が膝を折らないようにがっちりと支えてくれる小此木神官長の心遣いを感じ、蒼司朗は震えわななく身体にぐっと力を入れる。

「――――若様は……？」

掠れた声で訊ねた蒼司朗に、小此木神官長は微笑む。

「大丈夫、元気になられましたよ。勇輝くんがお城に運んでくれて、すぐに処置できましたからね」

「よかった……」

枝打ち斧に縋るように立ち、蒼司朗は安堵する。

「帝都は四神に護られた、神聖な地です。清く正しい者が、穢れに負けるようなことは、絶対にありません」

小此木神官長は断言する。

「だから、何も心配しなくていいんです」

緊急事態を知らされた四神の戦士は、一足先に帝都南公園に向かっている。
落ち着くようにと、小此木神官長はぽんぽんと蒼司朗の肩を叩く。
「誰か！　蒼司朗くんに水を一杯ください」
「――――はい！　少々お待ちください」

社務所の奥から蒼司朗に水を運んできてくれたのは、神官装束を纏って神官に紛れた柳生蘭丸だった。
驚く蒼司朗にコップを渡し、ピヨ四神に水皿を差しだして、柳生蘭丸は言う。
「帝都南公園で、望威を見かけたという者がいます」
（やっぱり……！）
蒼司朗は硬い表情で水を飲む。
「ミギャギャ」
「キュイキュイ」
「ピピチュピピ」
「「（しゅー）」」
機嫌よく水を飲む愛らしいピヨ四神に、柳生蘭丸は微笑む。

「蒼司朗様の水には、蒼司朗様用の『帝都のよく効く薬』を溶かしてあります」
味や匂いに何も変化はないが、蒼司朗にとっては体力回復の、特効薬になる。
この水を飲んでいれば、体力を著しく消耗する、四神変化も行える。
「ありがとうございます」
「どうぞ、お気をつけて」
柳生蘭丸は空のコップと水皿を持って、奥に下がった。

駆けてきた新庄神官が、社務所にいた小此木神官長に報告する。
「準備できました！」
「よろしい！　帝都南公園へ出発です！」
その声を欲していた新庄神官は、会釈して駆け戻る。
「集合は西門です」
さぁ、と小此木神官長に背中を叩かれた蒼司朗は、社務所に寄ったのに、自分だけ神官装束に着替えていないことに気づいたが、もう着替えている暇はない。
「行けますか？　蒼司朗様」
鈴宮神官に気遣うように声をかけられ、蒼司朗は顔を上げた。

「大丈夫です！」

集合の場所に走り、蒼司朗は出動する神官たちと一緒に、帝都南公園に向かう。

帝都城下は、何か困った事態がないか、巡査が巡回しているのと同じように、私服の神官によって異変がないよう、二十四時間監視されている。

帝都南公園から漂う瘴気は、近くにいた神官にすぐに感知された。神官は一般人に紛れている公儀隠密に異変を知らせ、ただちに道路や区画の閉鎖措置をとってもらう。

瘴気が外に広がり出ないよう、帝都南公園は封鎖され、中にいた者たちは、速やかに公園の外に退避させられた。

「いったい何があったんですか？」

作業を強制終了させられた望月造園の親方、望月左近は、入り口に縄を張って公園を閉鎖し、結界を張っている作業員姿の公儀隠密に訊ねる。

「ここから蟲によるものと思われる、強い瘴気が放たれています。すぐに帰って、穢れを落としてください」

帝都で各戸に無料で配られている石鹸は、穢れを落とすものだ。毎日身綺麗にし、道具の手入れも抜かりなく行っている帝都の職人は、表面についた穢れなんてすぐに落ちる。

「わかりました。ったく、あともうちょいだったってのによ……！　おーい、野郎ども、引き上げでぃ！」

待っていても、作業再開できる状態ではないとわかり、左近は庭師たちに望月造園に戻るよう、声をかけた。

どうしたのだろうと気になって、左近の後をついてきて聞き耳を立てていた清志朗は、蟲と聞いて、どきりとする。

（前の、僕がやったあれが原因なんじゃないよね……）

清志朗はこの公園に、蟲を入れた缶を埋めたことがある。蒼司朗があの後、天の戦士の力で浄化してくれたが、何か悪影響が残っていたのではないかと考えると、落ち着かない。

「――蒼くんが来るかもしれないから、残っていいですか？」

清志朗は左近に居残らせてくれるように頼む。

蒼司朗は望月造園が今日、この帝都南公園の作業をしていることを知っている。庭師の皆はどうしただろうかと、気にするだろう。清志朗の考えは、左近にもわかった。

「遅くなるんじゃねぇぞ。寮に帰る前に、必ずうちに寄れよ」
左近は清志朗を一人残し、庭師を全員連れて望月造園に戻る。清志朗はお辞儀して、皆の乗ったトラックを見送った。

神官によって閉鎖空間になった帝都南公園の中では、小さな蟲たちが食らいあい、爆発的な勢いで、大きな蟲になっていく。

「この前『蟲呼びの夜』やったばっかりじゃないですか」
式神を送られて駆けつけた安藤奏は、不機嫌な顔で帝都南公園に入り、四神変化する。
「青龍斬撃、剣乱破砕！」
大きく振り下ろした巨大な青龍刀から、何百という白刃が放たれ、蟲を切り刻む。

「講義初日から欠席なんて、とんでもないわ」
「まったくですね」
帝都南公園に駆けつけた芙蓉薫子と蔵田実親も四神変化し、大きくなった蟲を退治する。
「朱雀炎舞、劫火招来！」

舞うように優雅に動かされた芙蓉薫子の羽根扇が、渦巻く紅蓮の炎で蟲を焼き尽くす。
「玄武烈封、鎮露凍！」
蔵田実親の振るった多節鞭が白い霜を放ち、瞬時に凍りついた蟲は粉々に砕ける。

帝都神社から到着した神官は、四神の戦士を補佐して蟲を退治する攻撃組と、結界を受け持ち祝詞を唱える組に別れて、それぞれの役目を果たす。
祝詞を唱える神官の中に一人だけいた、学生服姿の蒼司朗は、身長が低いせいですっかり隠れてしまっていたが、梶や薙刀の中に、見慣れた枝打ち斧があったので、清志朗にはすぐに見つけられた。
（蒼くん……！）
大丈夫だからと、清志朗は蒼司朗に手を振っておく。
（清ちゃん！）
神官と一緒に祝詞を唱えながらも、手を振る清志朗に気づいた蒼司朗は、無事な姿を見て、ほっとする。

「神官長、瘴気の減る気配がありません……！」

瘴気を探っていた鈴宮神官は、困惑する。四神の戦士が退治しても、蟲は減らない。
こんなことはこれまでになかった――――！

「小此木神官長！」
青龍刀を振るいながら、安藤奏は叫ぶ。
「四神奥義の発動を！」
神官長の許可が必要な大技は、四神の戦士四人の合技だ。
一気に蟲を退治できる。

「――――がんばってください！」
小此木神官長は、エセ爽やかな笑みを浮かべて、安藤奏に手を振った。

四神の戦士に式神を飛ばした小此木神官長は、万一の用心に、若様の警護をするよう命じて篠原勇輝を帝都城に残した。四神の戦士のうち、篠原勇輝だけは、ここにはいない。
四人揃わなければ、四神奥義は使えない。

退治しても蟲が減らないのには、何か原因がある。
水平に腕を上げ、玉串を握っていた小此木神官長は、風見鶏のように身体の向きを変えながら、慎重に気配を探る。
小此木神官長はある一方向で、むっと眉を顰める。
「……公園の中に、妙なものがありますね。新庄神官、鈴宮神官！」
神官を二人連れて、小此木神官長はそちらへ向かう。

同行したものの、神官候補生の蒼司朗は、一人前の神官として数に含めるには実力不足であてにできないが、短時間でも四神変化して天の戦士の力を使うことができる。
四神の戦士の三人を、手助けできるかもしれない。
「オレも行きます！」
「ミギャ！」
「キュオ！」
「ピチュ！」
「「（しゅー！）」」
蒼司朗は、清志朗が色々な意味でここに残ったことをわかっていた。

勇ましい蒼司朗とピヨ四神に、小此木神官長は、にこっと笑う。
「四神の戦士の邪魔にならないように、気をつけて。自分の身は、自分でしっかり守りなさい？」
「はい！」
フォローする余裕がないと言われて、蒼司朗はわかったと力強く頷く。
「踏ん張れ！　安藤！」
声援を送った蒼司朗に、安藤奏は立腹して怒鳴り返す。
「あんたなんかに言われなくても！」

四神の戦士の中、一番年下の安藤奏には、自分は年下だからという甘えがある。
年上でも同じような体格で、素人同然だった蒼司朗は、奥庭の四神様のお世話をしてお庭番の仕事をこなし、四神変化して天の戦士になれても、安藤奏の意識では『格下』で、格好悪いところなんて絶対に見せたくない相手だ。
応援することで安藤奏を発奮させた蒼司朗に、くすっと芙蓉薫子は笑い、蔵田実親はち

らりと視線を送る。
（頼んだよ、蒼司朗クン）
誰よりうまく動けるのは、蒼司朗しかいない。

大きな蟲は四神の戦士や神官に退治されるが、小さな蟲は結界を狭めて集められ、大きな蟲にしてから退治される。小さな蟲は、取るに足らないモノ、なのだが――。

「――なんですか!?　あれは」
小此木神官長は、初めて見るものに目を丸くする。

公園の一角に、半径一メートルはあるだろう、大きな鉄の球体があった。
公園という場所柄、蒼司朗たちは一瞬、新種の遊具かと思ったが、植え込みと通路の境に放置するように、遊具が設置されることはない。
銀色のピカピカの球体は、完璧なバランスで丸く、繋ぎ目はどこにもない。
瘴気と蟲は、その球体の底面から溢れでているように見える。

「ぶっ潰しますか？」
豪腕無双の新庄神官は、素手で鉄球を押し潰しそうな勢いだ。
「危険です、新庄神官、やめてください……！」
懇願するように鈴宮神官は止める。新庄神官に飛びだして行かれては、たまらない。

「ピ！」
チビ朱雀が何かを見つけたようなので、蒼司朗はその方向に目を凝らす。
（……あれ？）
鉄球の下部、瘴気の出てくるあたりに、何か、小さなものがある――――？

「――――小此木神官長、あの鉄球を結界で保護できますか？」
蒼司朗に訊ねられ、小此木神官長は首を傾げる。
「できなくはないですが……、鉄ですからねぇ」
蟲は鉄球には侵入できない。穢れも容易に落ちる。わざわざ結界で保護する必要はない。
「できるなら、保護してください。お願いします」

「ミギュギュ」
「キュウ」
「「（しゅー）」」
タッチされて急かされ、蒼司朗は小此木神官長に急いで頭を下げる。
「すみません、勝手します！」
枝打ち斧の刃に被せた袋を取り、蒼司朗は鉄球に向かって走る。
（あの、下にある、あれだ。あれがよくない……！）
はっきり見えないが、あれを取り除けば――――！

駆ける蒼司朗から、七色の光が弾けた。
至近距離で弾けた眩い光に、小此木神官長たちは驚く。
（四神変化!?）

七色の光に包まれて、蒼司朗は頭の中が真っ白になり、意識が霞む。
奥庭の四神と、ひとつになる――――。

七色の光は虹色の光の卵となって、蒼司朗を包みこんだ。
（オレの力で、帝都を、守る……！）
誰のどんな企みがあったとしても、絶対に。

蒼司朗を包みこんでいた虹色の光の卵に亀裂が走る。
奥庭の四神の加護を受け、天の戦士が孵化し、目覚める――――！

間近で四神変化した蒼司朗に、小此木神官長たちは目を瞠る。
「うわー、近くで見ちゃいましたねぇ」
小此木神官長は楽しそうだが、新庄神官と鈴宮神官は、声も出ない。
（これが、望月蒼司朗の四神変化……！）
（なんて美しい……）
小此木神官長は注意を促すように、手に持っていた玉串を二人の神官に向かって振る。
「ほらほら、見惚れてちゃだめですよ。新庄神官、防御結界を。鈴宮神官は、あの鉄球の保護結界を」

「は！」
「はいっ！」
我に返った二人は、印を結び、それぞれ結界を張る。
虹色の光の卵から、四神の加護を示す鎧を纏った蒼司朗が現れる。
そっと目を開いた蒼司朗の手に、立派な戦斧が握られた。
「お庭番、望月蒼司朗、参る！」
ふわり、背の真紅の翼を広げ、天の戦士となった蒼司朗が地を蹴って飛ぶ。
（何か……、刺さってる）
鉄球を見下ろした蒼司朗は、しっかりと下部の一点を見据えて、戦斧を構える。
「四神演武、真日企！」
振り下ろされた戦斧が、虹の軌跡を描いた。

戦斧の先が浅く地面を抉り、小さなものを弾き飛ばす。

それは、地面に刺さっていた、長さ十センチにも満たない、黒い柱状結晶。

結晶が抜けた瞬間に、噴きだしていた瘴気がぴたりと止まった。次々に這いでてきていた、小さな蟲も、出てこなくなった。

変化は、巨大化した蟲を退治していた四神の戦士や神官たちにも感じ取れた。

（今の……）

（『塞がった』……！）

戦斧が描いた虹の軌跡が鉄球に触れ、鉄球の表面が、シャボン玉のように頼りなく揺らめき、銀の光となって弾けた。

弾けて消えた鉄球の中にいたのは、小さな球体に長い脚を組んで悠然と腰掛けた、異国の装束を身に纏う背の高い男。腰を下ろしていた球体も、弾けて消える。

広げた真紅の翼で僅かに身を浮かべていた蒼司朗は、地面に降り立つ。

爪先が触れた途端、蒼司朗の纏っていた四神の鎧は、虹色の光となって散った。

腰掛けをなくして立ち上がった、砂の国から来た若い商人は、ひたと見据える蒼司朗を見つめ返し、口を開いた。

「うわぁん！　蒼司朗センパイー、怖かったヨー!!」

10

迷惑な騒動を起こして大泣きした少年は、小此木神官長に保護され、帝都南公園のすべての浄化処置を終えた後、帝都神社に連れていかれた。

成人男性なら警察に逮捕されるところだが、外国人で、しかも子供だったので、とりあえず事情を聞くことにしたのだ。

「公園をひとつ、消しテしまう予定だったネ」

泣きやんで落ち着いた望威は、顔を洗ってきて、社務所の奥の応接室で、鈴宮神官からホットミルクをもらって無邪気に言った。

「美味しいでス」

「そうですか。お替わりもありますよ」

口に合ってよかったと望威に微笑み、他の者たちにはお茶を配って、鈴宮神官は応接室

の端に挟える。応接室の出入り口のところには、口を真一文字に引き結んで腕組みした新庄神官が、威圧感ムンムンで立っていた。

両手でカップを持って、ほこほこと幸せそうにホットミルクを飲む望威の姿は、図体が大きいので、なんだか異様だが、まだ十五歳なので、ここはスルーすべきだろう。

望威は公園を消して蒼司朗を驚かせ、公園を戻すのと引き換えに、蒼司朗の『緑の石』をもらうつもりだった。

「公園をひとつ、って……☆」

とんでもない発言に蒼司朗は呆れ、帝都神社に駆けつけた篠原勇輝は、望威の背中に蹴りを入れた。

蹴られて椅子から落ちた勢いで、カップが望威の手から離れたが、ホットミルクはなくなっていたので、ぶちまけられずに済んだ。

「テメー、ぶっ飛ばすぞ！」

「ウわぁ！　ゴメンナサイゴメンナサイ！」

凶悪な顔で凄む篠原勇輝に、床に正座した望威は水飲み鳥のように頭を下げる。

安藤奏は不機嫌な顔で望威を見つめ、芙蓉薫子と蔵田実親は、やれやれと溜め息を吐く。相手をするのも馬鹿らしくて、まともに怒る気もしない。

作業場所を荒らされ、迷惑を被った望月造園の者として話を聞きに来た清志朗も、何も言う気がしない。

若様が具合を悪くしたが、望威にそのような意図はなかった。何が起こったにしろ、明確な悪意を持って仕掛けたことではないのだ。

「蹴ってから言わないようにね、勇輝くん」

小此木神官長は篠原勇輝を穏やかに注意すると、望威に手を貸して立たせ、椅子に座り直させる。

「なんですか？　砂の国の人たちの間では、そんな手品が流行ってるんですか？」

「手品でハないでス」

ぷっと望威は頬を膨らます。

「ボクの集めていル石を使えば、できるヨ」

望威はポケットから宝石箱を取りだし、蓋を開ける。

宝石箱に入っていたのは、カットや研磨をされていない、原石らしい結晶の色石だ。

「これハ全部、いろいろな力を持った石でス」

望威は六角柱の形をした、黒い石を指で摘む。

帝都南公園で、蒼司朗が天の戦士になって、掘りだした石だ。

「これをひとつ埋めて『穴を開ける』ことデ、だいたいあの公園ひとつが、『神隠し』みたいニ丸ごと吸いこまれるはずだったネ」

「吸いこまれるって……」

「この石の中にでス」

望威は真剣に言う。

「なのに、『穴を開けた』ら、小さい小さい蟲がたくさん出てきましタ。とても小さい蟲だけド、すごくよくないもののような気がしましタ」

蒼司朗たちには真っ黒い靄のように見えていたが、瘴気は霊力のない普通の者の目には見えない。

望威には砂粒ぐらいの小さな蟲が続々と現れたのが見えただけだが、その蟲は瘴気と穢れに塗れていたので、なんとも不気味で不穏な感じがしたのだろう。

「だから、これで身を守ったネ」

望威は灰色の氷砂糖のような結晶を、摘みだす。

「これを膨らませテ中に入れば、水の中でも火の中でも、砂の中でも大丈夫でス」

石なのに、風船のように扱えるらしい。

外からは銀色に見えた鉄球に酷似したものは、しかし内側からはガラスのように透けて、周りの様子がわかるようになっていた。

望威は小さな蟲たちが互いを食らいあい、どんどん大きな蟲になっていくのを見て、驚愕した。

いつまで経っても出てくる蟲が途切れる兆しはなく、身を守ることはできても動けず、予想外の大変なことになったらしいと、困り果てていたところに、神官が駆けつけ、蟲が退治された。



そして蒼司朗が来て、地面に埋めた黒い石を掘り起こして、蟲が出てくる現象を止め、望威を解放してくれたのだ。

小此木神官長は、軽い目眩を感じて、額に手を当てる。

「帝都城下に、『穴』ですか……」

国中の綻びを引き寄せている帝都には、空気穴のように、蟲の出る微小な穴があちこちに開いている。

穴の大きさが広がらないよう、結界で厳重に制限をかけているというのに、想定外の方法で、公園ひとつが吸いこまれるような穴を開けようなどと試みられては、たまったものではない。

刺さった黒い石は、帝都の土地を刺激して、蟲の溢れでる穴を広げる結果となった。蟲が噴きだしてくる力が強すぎて、黒い石は埋まり方が浅くなり本来の力を発揮できず、公園が吸いこまれることはなかった。

「どんな凶悪な事件が企てられていたのかと思っていたのですが、仕掛けた側にも予想外のアクシデントだったようですね。大騒ぎさせられましたが、外国から来られた方の失敗のひとつと考えることができるでしょう。影響を受けて、若様が倒れられて――」

「ハ？」

小此木神官長の言葉に、間の抜けた声をあげ、望威は目を丸くする。

「若様ガ、倒れタ？」

「テメーのせいだよ……！」

ちっと篠原勇輝は舌打ちする。

周りの皆が険しい表情になって口を噤んだので、嘘や大げさなことではないとわかり、さぁっと望威は青ざめた。

「オォオォォォ！」

奇声を発した望威に驚いて、びくっと蒼司朗たちは身を退く。

大げさに嘆きのポーズを決めた望威は、悲痛な声で言う。

「若様に、そんナ酷いことをしたなんテ……！　大罪人のボクは、ヨコヅナにシメナワで百叩きされテ、生きたままシャチホコに足を挟まれテ、オオハゲタカが食べて骨だけになるまで、お城の天守閣から逆さ吊りの刑ですネっ!!」

「そんなわけあるかっ！」

蒼司朗が怒鳴り、小此木神官長と蔵田実親は顔を伏せ、肩を震わせて笑う。同室で立ち会ってはいなかったが、話が聞こえた神官たちが、腰砕けになってしゃがみこんだ。芙蓉薫子と安藤奏は唖然とし、篠原勇輝はガッツと望威の椅子を蹴る。

「馬鹿かテメー！　帝都をどこの野蛮な国と勘違いしてやんでぇ！」

「ワ！」

巻き舌で威勢よく怒鳴られ、望威はびっくりする。

「……望威くん、さっきの誰に聞いたのかな？」

恐る恐る訊ねた清志朗に、きょとんとしながら望威は答える。

「入谷ト那智に聞いたヨ。若様に、くれぐれも失礼ナことをするなっテ」

うっとうしいほどきょろきょろしていた入学式のことを思い出し、蒼司朗たちは生温かい気分になった。

入学式のときは、那智がオニギリを投げて実力行使し、落ち着きのない望威が失礼な真似をする前に止められた。

だが、目の届かないときに、若様に失礼なことをさせてはならない。望威が怖がりそう

な言葉を適当に並べたら、あんな感じになったのだろう。
いろいろ間違っているが、効果は絶大だった。

笑いすぎて引きつった腹筋を摩り、こほんと小此木神官長は咳払いする。
「望威くん、あなたはまだ帝都に来て日が浅いですし、砂の国という異国の方です。悪意ある行動ではなかったようなので、今回は逆さ吊りナシで、勘弁してあげましょう。厳重注意、というやつです。次に同じようなことをしたら、帝都タワーのてっぺんに、刺しますからね」
「か、かちこまりまりた……！」
望威は緊張しながら頭を下げる。言葉が変になっているが、真顔で大嘘をついた小此木神官長は気にしない。
「では、お家の方に連絡して、迎えに来てもらいましょう」
望威は寮生だが、今日は宝飾品店に連絡し、迎えに来てもらう。
「――――若様に、お詫びしたいでス」
萎れた犬耳とだらんとしたふさふさ尻尾が見えるような、しゅーんとしょげた様子で、

望威は言った。

「は！　テメーなんか、若様に目通りかなうかよ……！」

篠原勇輝はせせら笑ったが、蒼司朗は考える。

「お城に向かって頭下げるだけでもいいんじゃないか？」

直接会えなくても、気持ちだけは。

「言いだしっぺが連れてけよ？」

「うー、まぁ、仕方ないな」

面倒ごとは御免だと、篠原勇輝に丸投げされたが、今日はもう抱きつかれそうにないし、構わないだろうと蒼司朗は思う。

「俺は若様に会ってくけど」

舌を出す篠原勇輝に、蒼司朗は頬を膨らます。

「しーのーはーらー！」

「俺は特別なんだよ」

若様のお世話係である篠原勇輝は、許可をとらなくても、いつでもお城に上がって、若様に会いに行くことができる。

若様を急いでお城に運んだ際、置き去りにした鞄は、公儀隠密が回収して、帝都神社の社務所に届けておいてくれた。

いつもより厚みのある鞄を小脇に抱え、ぽんと叩いた篠原勇輝に、ちゃんとお城に上がる用件があることを、蒼司朗は思い出した。

「三人で一緒にお行きなさい」

小此木神官長は、にっこりと微笑んだ。

予定外の緊急呼集を受けた四神の戦士、芙蓉薫子と蔵田実親、安藤奏は、忙しい身なので社務所を退出した。望威から話を聞いた小此木神官長と、それに立ち会っていた新庄神官、鈴宮神官も、自分の仕事に戻る。望月造園に戻って、経緯を説明しなければならない清志朗も、帝都神社で蒼司朗と別れ、城下に向かうことにする。

蒼司朗と篠原勇輝は、望威を連れて内堀にかかる西の橋を渡り、警備員の立つ門を通り、帝都城に向かう。武器として用いることのできる長い棒状のものを持ちこむ人間がいれば、警備員のチェックを受ける。しかし蒼司朗の場合は、何を持っているのかよく知られ

ているので、問題ない。

平日の夕方の帝都城公園は、遊歩道で散歩やマラソンをしている人や、色々な施設の利用者が大勢いて賑やかだが、内堀を越えた帝都城は特別な催しがない限り、見学者が主になるので、人影はまばらだ。

門を通っていくらも行かないうちに、望威は足を止め、口を開けてお城を見上げた。

こんなに大きい建築物は、砂の国にはなかった。遠くから見ていた感覚で、もう少し小さな建物であるような、錯覚を起こしていた。

「……おおお、お城ッテ、大きいですネ……！」

見上げるだけで、首が痛い。

「当然だろ。帝のいらっしゃるお城だぞ。全部の城の中で、一番大きいからな！」

ふんと自慢して、篠原勇輝は慣れた様子でお城に入っていった。

入り口の門番も、顔パスである。服装は不良っぽくても、綺麗な姿勢で歩いていく篠原勇輝は、なんとも格好よかった。

緊張した様子の望威に、ちらりと視線を送られて、蒼司朗は苦笑する。

「オレは呼ばれないと、お城になんて上がれないよ」
篠原勇輝は自分でも言っていたとおり、特別なのだ。
許可をもらわなくても、警備員に注意されないところまでなら、自由にお城に近づくことはできる。
「望威くん？」
「こ、ここまでで、いいでス……！」
お散歩したくない犬のように、城の大きさに圧倒されて後込みする望威に、お城を見上げて、蒼司朗は呆れる。
「いや、いくらなんでも、もうちょっと近寄ったほうがいいんじゃないか？」
せっかく若様にお詫びに来たのだし。
真下まで行かないと、城の中にいる者に声が届かない。
しかし、望威はじりじりと後ろに下がる。
「イエ、イエ……！」
「おい？」
遠くなる声に、蒼司朗は振り向く。

振り向いた蒼司朗を見た望威が、ぎょっと大きく目を瞠る。

「ミギュ？」

蒼司朗の学生服の胸元に前肢をかけ、顔を覗かせたチビ白虎が、きょろんと首を傾げる。

「キュウ」

蒼司朗の肩に寝そべるように乗っていたチビ青龍が、ふりふりと尾を振る。

「ピッチュチュピ」

ぽっちりと頭の上にお座りしたチビ朱雀が、小さな手羽を動かす。

「「（しゅー）」」

学生服のポケットから身を乗りだしたチビ玄武の亀と蛇も、ふんふんと首を動かす。

「あ、れ？」

望威の視線を追って、蒼司朗ははっとする。

ここは、帝都城内堀を越えたところ。

奥庭の四神が守護する聖域である。

ちびっちゃくなってしまった奥庭の四神様のお姿が、霊力のない者の目にも見える。

可愛いものパラダイス状態の蒼司朗の姿に、ぷちっと望威の中で何かが切れた。

「フォ――――！」

絶叫した望威は、鼻血を豪快に噴出しながらぶっ倒れた。

臨界点を突破したようである。

知らせを受け、駝鳥に乗った那智と一緒に迎えに来た入谷は、望威が鼻血を噴いて倒れる瞬間を目撃する。

「坊ちゃまーっ！」

内堀を越えた先で噴き上がった血飛沫を目撃し、やや離れた場所にいた公儀隠密たちが、ぎょっとする。

「何ごとかっ!?」

作りものの血糊などではない証拠に、漂っているのは紛れもなく血臭だ。

「ご無事ですか!?　蒼司朗様！」
音もなく集まった十数名の公儀隠密が瞬時にして、奥庭のお庭番である蒼司朗を、背後に庇いながら取り囲んだ。

（内堀を越えた先、お城の前を血で汚したら……やっぱマズイよな）
たとえそれが、鼻血であっても。
まったくお咎めナシとは、思えない。

「ミゴ」
「キュ」
「ピ」
「「（……）」」
なんかヤダとばかりに、ぶっ倒れた望威を眺めたピヨ四神は、静かに頭を引っこめた。

（オレ、コイツと仲良くなれる気がしねー……☆）

公儀隠密の背中越しに、幸せそうな顔を血まみれにしてぶっ倒れている望威を眺め、蒼司朗は溜め息を吐いた。

了

ようこそ帝都へ

春休みには、植野動物園の開園記念日がある。お正月に開園記念日のあった遊園地・幸楽園と同じく、年に一度、入園料が無料になる日だ。

「望月造園も休業日だよ」

清志朗に教えられて、蒼司朗はきょとんとする。

「休業日なんてあるんだ……」

造園業者も農作業と同じく、晴耕雨読が基本だ。悪天候の中、作業はできない。顧客や作業場所にも都合があるし、予定していても変更があるのは日常的なことだ。

普通の仕事は朝早くから夕方までだが、『蟲呼びの夜』のある日は、夜半から待機して、早朝までに作業を終えなければならない。臨機応変に作業日や場所を変更して仕事をするので、望月造園は不定休で、時間も不規則だ。

望月造園では休日返上で、深夜も予定が組まれる印象があったので、休業日の存在そのものが、蒼司朗には驚きだ。

「巌手造園じゃ、休業日なんてなかったよ」

蒼司朗の父が親方だった、巌手城のお抱え庭師のところでは休業日はなかったので、こちらでもてっきり同じだと思っていた。

「お祖母ちゃんが猫アレルギーで、うちではペットを飼えなかったからね。お祖父ちゃんが、父さんと蒼くんのお父さんを植野動物園に連れて行けるように、休業日にしたみたいだ。望月造園で働いてる庭師の人たちの、家族サービスにもなるしね」

「あぁ、なるほど」

春休み中だが平日なので、開園記念日の植野動物園はそれほど混雑しない。

「たいてい望月造園の誰かが場所取りしてるから、植野公園でお花見もできるよ」

ちょうどお花見シーズンで、植野公園は雪洞がたくさん吊るされ、夜も大勢の花見客で賑わっているだろう。

「蒼くん、植野動物園、行く？」

「行くー！」

帝都に来て、望月造園の庭師見習いになった蒼司朗の初めての休業日は、植野動物園行きに決定だ。

「まずはパンダだよな！　パンダ見るの、ひさしぶりだー！」

望月造園は休業日でも、奥庭の仕事に休業日はないので、蒼司朗はいつものように早朝から奥庭の仕事をする。その後、愛用の枝打ち斧を持った蒼司朗は、帝都学園高等部の学生服で清志朗と一緒にバスに乗り、植野動物園に向かう。

にこにこと機嫌よくバスに揺られている蒼司朗を、きょろんとピヨ四神は見上げる。

「ミギャギャ？」

「キュ」

「チュピピ」

「「（しゅー）」」

「んー？　パンダっていうのは、白黒の熊だな。可っ愛いの」

「ミギュン」

甘えた声を出し、くふふんと自慢するように顔を上げたチビ白虎に、蒼司朗はくすっ

と笑う。

「うん、お前も白黒で、可愛いな」

優しくチビ白虎の喉を撫でた蒼司朗に、他のピヨ四神が拗ねる。

「「「ぶー☆」」」

「白黒じゃなくても、可愛いって。みんな、オレの大事な四神様だよ」

順番に優しく撫でられて、可愛がってほしかったピヨ四神は、満足して機嫌を直した。

ピヨ四神が見えない者には、妙な行動をとっている蒼司朗を、さりげなく隠しながら、清志朗は微笑む。

「前に一緒に行ったのは小学一年生の夏休みで、日曜日だったから、混んでたよね」

「うん。パンダの赤ちゃんの公開が始まったところでさー、めちゃめちゃ混んでたー。柵のところまで行けたけど、ゆっくりできなかったから、あんまりよく見えなかったなぁ」

小さな子供は、大人より柵に近づける特権がある。動物園は埃っぽいし、大人が履いている靴の上が幼児の通り道だったりするので、動物園には歩きやすくて汚れてもいい靴で行くものだ。

あの年、初めて帝都に誕生した赤ちゃんパンダは大人気で、とにかく来園者が多かった。流し見どころか、人波に押し流されながら、さぁっと前を通り過ぎただけという感じだった。

（あれから、十年――――）

あのときには保護者がいなくては入れなかったから、伯母に連れてきてもらったけれど、今は従兄弟二人でどこにでも行ける。

「蒼くん、驚くんじゃないかなぁ」

清志朗が笑った理由は、植野動物園に入って、パンダのところまでやってきてわかった。

「……赤ちゃん」

ころころと遊んでいる愛らしい姿を見て、目を丸くする蒼司朗に、清志朗は教える。

「去年の夏に生まれたんだ。昔、蒼くんと一緒に見に来た、あの赤ちゃんパンダが、お父さんになったんだよ」

「そうだったんだ……」

帝都の一角で健やかに育まれていた生命に、蒼司朗は胸を熱くする。

動物をひと通り見て回って、蒼司朗と清志朗は植野動物園を出る。植野公園に向かおうとして、駅が見えて、蒼司朗は足を止める。

「蒼くん？」

「――――うん、ここが、オレの帝都の第一歩だったんだ、って思ってさ」

厳手を出た夜行列車は、帝都駅ではなく、植野駅に到着する。

ここで蒼司朗は列車を降り、貨物として運んだ小さいショベルカーで、帝都城を目指したのだ。

初めて一人で列車を降りた。一人で夜明けの道を進んだ。

（がんばってるよ、オレ）

一人で帝都に来て、無我夢中で、できるかぎりのことを精一杯やってきた。

「――――おーい、蒼ちゃん！　清志朗坊ちゃーん！」

植野公園に向かう道で、追加の酒の買い出しに行ってきたらしい、庭師の池波が大きく手を振っていた。

「早く来ないと、親方たちが弁当全部食べてなくなっちまうよー！」
誰かが来るたびに持ち寄った食べものが何か増えていったり、買い出しに行ったりするので、すべて食べ尽くされることはないのだけれど。
「行こう、蒼くん」
「うん！」
「ミギャギャギャギャ」
清志朗に促され、蒼司朗は植野公園で花見をしている、望月造園の庭師たちのところに行く。お弁当と聞いて、食いしん坊のピヨ四神が、大はしゃぎした。
「伯父さん、これ、お菓子ー！」
蒼司朗は清志朗と二人で買ってきたパンダ饅頭の箱を開け、花見弁当と一緒に並べる。
「おう、すまねぇな。清、飯食ったら、蒼連れて墨田川行きな。いい具合だぜ」
「そうだね、行ってくるよ」
「墨田川？」
「船に乗ろう、蒼くん」
墨田川の遊覧船。

お花見の時期には、川岸に植えられた桜並木から零れた花びらで、川面には花筏が浮かんでいる。船から眺める帝都の桜も、素晴らしい。

「――――で、船に乗ったあと、ぶらぶらしてからまた植野公園に戻って、皆で夜まで騒いで夜桜見物して。オレがお花見に行った日って、こんな感じだったけど？」

鼻血を噴いて倒れた望威を、帝都大学附属病院まで見舞いに行った蒼司朗は、清志朗と顔を見合わせながら、今年のお花見について説明した。

しみじみと入谷は頷く。

「なるほど、帝都の民は桜の花を愛でるのだということがよくわかりました」

帝都大学附属病院の中庭にも、満開の桜の木があり、そこに茣蓙を敷いてゆっくり弁当を広げて寛いでいる者たちがいた。

屋内に食堂があるのに、なぜわざわざあの場所にだけ集まって食事をするのだろうかと、砂の国の者には不思議でならなかったようだ。

砂の国は日差しが強く、砂からの照り返しも強い。風が吹くと砂が飛んできて、じゃりじゃりになってしまうので、屋根や風除けのない場所で、食べものをのんびりと広げて寛

ごうなどとは絶対に思わない。

「花見……」

呟いて窓の外の桜に目をやる那智に、清志朗は微笑む。

「ここや、僕らの学校のある帝都城公園北側は、まだ桜が見頃だから、お店が休みの日にでも、お花見すればいいよ」

「あ、えっと、お弁当ってわかるかな？　お店でも買えるけど」

文化の違いがあるかもしれないと考えた蒼司朗に、ベッドで横になりながら、にこっと望威は笑う。

「帝都に来る前ニ、ちゃんと食べもののこと、研究してきましタ」

「坊ちゃまたちのような、学生さんの食べるものを調べて、作れるように練習したんです。坊ちゃまが恥ずかしい思いをされないように」

入谷は横に置いていた鞄を取り、中からアルミホイルに包んだ丸いものを取りだす。

「蒼司朗様も、おひとつどうぞ」

手渡されたものは、入学式の日に講堂で見た覚えのある――――。

「オニギリは、小腹が減ったときに、食べ足すのによいと聞きました。携帯できて、便利

ですね。三角形、俵型、色々な形があるようですが、私は丸いものが作りやすいです」

入谷は、にこにこと、とてもいい笑顔なのだが。

「そうですね……」

手渡された『オニギリ』を、蒼司朗は両手で持つ。

（……これ、めちゃくちゃ硬くない？）

アルミホイルに包んであるという理由だけでなく。そして。

（重い……☆）

ただ米粒を集めて丸めただけのはずが、砲丸のようにずっしりと重い。

「ミギャ？」

「キュウ～」

「ピ」

「「（……）」」

結界の保護領域ではないので、望威たちにはピヨ四神の姿は見えない。蒼司朗にいつものようにくっついていて、顔を出した食いしん坊のピヨ四神は、どんなの？　と『オニギリ』を見て、鼻ふんふんしたあと、すーっと引っこんでいった。

ピヨ四神の姿が見えている那智は、うむ、と頷く。
感触以外にも、嫌な予感ひしひし！
「――――今はお腹が空いてないので、後でいただきますね」
にっこり笑顔で、蒼司朗は『オニギリ』をお持ち帰りにする。

どれだけの圧力を加えて作られたのかわからない『オニギリ』は、釘が打てそうなほど硬かった。
素人には、とても歯が立たない☆

二〇一二年二月二十五日　流星香　上野動物園の開園記念日は三月二十日です♡


コミックス一巻発売
おめでとうございます。
望月造園



本日はお花見



最新刊発売
おめでとうございます！

◆お庭番コミカライズ担当させて
いただいております
天海と申します。
前回に引き続きまして原作の貴重な
１ページいただきまして
流先生本当にありがとうございました！

最新刊…楽しみにしておりましたので
読むのがとても楽しみですッ
流先生、榊先生
本当におつかれさまでした！！

天海春也!!

B's-LOG BUNKO
ビーズログ文庫

■ご意見、ご感想をお寄せください。
《ファンレターの宛て先》
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1
株式会社エンターブレイン
ビーズログ文庫編集部
流 星香　先生・榊 空也　先生
《アンケートはこちらから》
http://www.enterbrain.co.jp/bslog/bslogbunko/

■本書の内容・不良交換についてのお問い合わせ。
エンターブレインカスタマーサポート：0570-060-555
（受付時間 土日祝日を除く 12:00～17:00）
メールアドレス：support@ml.enterbrain.co.jp

な-1-16

お庭番望月蒼司朗参る！
人学式と不思議の色石

流 星香

2012年3月27日 初刷発行

発行人　浜村弘一
編集人　森 好正
編集長　森 好正
発行所　株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町 6-1
（代表）0570-060-555
発売元　株式会社角川グループパブリッシング
〒102-8177 東京都千代田区富士見 2-13-3
編集　ビーズログ文庫編集部
デザイン　永野友紀子（Zapp!）
印刷所　凸版印刷株式会社

本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化）等並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者等の第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。

ISBN978-4-04-727908-7
©Seika NAGARE 2012 Printed in Japan
定価はカバーに表示してあります。


封縛師
人生に不要なものがございましたら、当方に御相談ください。
人間でも記憶でも、お望みのままに封じさせていただきます。
―あなたのお悩み、封じます―
―あなたの記憶、封じます―
―あなたのお名前、封じます―
―あなたの思い出、封じます―
―あなたの悪夢、封じます―
黙っていれば
銀髪碧眼の美貌陰陽師が
暗躍(?)する、大人気シリーズ!
流星香
イラスト/睦月ムンク
B's-LOG BUNKO



愛され度No.1シリーズ

大好評発売中！

①宿命の兄弟
②未完の後継者
③幻影の従者
④偽悪の革命家
⑤純愛の死神
⑥聖なる闇人形
⑦微睡の想い人
⑧服従の支配者
⑨無垢な闇人
⑩生贄の神人
⑪天邪鬼の忠誠者
⑫独善の殉教者　通常版／DVD付特装版
外伝 最強戦士たちの多忙な日常

闇世界を統べる闇皇の後継者として突然指名された普通の高校生・后。ブラコン弟や変人陰陽師、個性派式神たちに振り回された修行が今始まる！

砂漠の薔薇と海の皇

許さない、帰さない——
究極の略奪系ラブファンタジー!!

あすか

イラスト／由貴海里（ゆきかいり）

大好評発売中！

① 灼熱の悪魔はささやく
② 侵略の貴公子はひざまずく
③ 復讐の皇子は微笑む
④ 紺碧の策士はまどろむ
⑤ 無垢な少年は恋をわずらう
⑥ 花嫁は闇に囚われる
⑦ 砂漠の王子は愛を誓う

初恋の人との婚儀を控えた夜、ルセリアは、盗賊のような男に攫われる!!　男の名は、ビアラン国の王子アルバトル。彼の情熱的な愛にルセリアは——!?



「オレに喰われる!!」

星が煌めく
ラブコメファンタジー、開幕!!

光欠ける暗黒星

イノセント・スター

小野上明夜（おのがみめいや） イラスト／さらちよみ

<星>と呼ばれる能力者であるエリッセは、何をやっても失敗ばかりの不幸体質。恩師グラシカルに報いようと、能力を増強する禁呪・暗黒星に手を出した！　……はずが、なぜかオレ様ディガンに拉致されて!?

ビーズログ文庫



双幻幽伝

天然公主は、超・引きこもり!?

「おうちに帰りたい……」
やる気ナシ公主とワケあり武官の
愉快・痛快中華ファンタジー開幕!!

木村千世（きむらちせ）
イラスト／くまの柚子（ゆずこ）

大好評発売中！

① 出逢いは前途多難！
② 宿敵は神出鬼没！
③ 二人は一触即発！
④ 箱庭は四面楚歌！

巷で噂の幽鬼が見える"天然公主"朧月（ろうげつ）……その実態は、超後ろ向きな引きこもり少女！　そんな彼女のもとに、ある日無愛想な武人がとある依頼をもってきて――!?

ビーズログ文庫



瑠璃龍守護録

花嫁様のおおせのままに!?

くりたかのこ　イラスト／キリシマソウ

傍若無人と噂の"半仙"王子・黎鳴と、彼の妃候補になってしまった心配性の少女・鈴花。龍が護る国の、言いなり中華ラブコメ登場!

第12回
えんため大賞
ガールズノベルズ部門
優秀賞受賞



海が愛したボニー・ブランシェ

Bonnie Blanche whom sea of Lexan loved.

海賊には恋を、修道女には冒険を――！
ときめき爽快ファンタジー！

緑川愛彩（みどりかわあい）
イラスト／明咲（あさき）トウル

開港祭の喧騒の中、天涯孤独の修道女ボニーは、両親の仇とされる青年海賊ファド・ディアスに接触する。それは、禁じられた恋の始まりで――!?

大好評発売中！

①海が愛したボニー・ブランシェ
②―聖女（ひじり）が眠る悪の楽園―
③―湖上の城に恋は燃える―
④―あなたを想う不思議の海域（トライアングル）―
⑤―運命と踊る冬薔薇の都―
⑥―果てなき海で愛に生きる―



腹黒(?)メイドの成り上がりラブコメ開幕!!

猫かぶり嬢とにわか貴公子

文月更（ふみづきさら）　イラスト／増田（ますだ）メグミ

大好評発売中！
①～箱入りメイドへ華麗な転落～
②～シンデレラの華麗な誤算～

貴族のお嬢様になるべく努力を重ね続けたシャーロット。社交界デビュー目前、父親が行方不明＝一文無しに!!



第13回 二期
えんため大賞
ガールズノベルズ部門
優秀賞受賞

おこぼれ姫と円卓の騎士

OKOBORE HIME TO ENTAKU NO KISHI

「さっさと頭を下げなさい」この女王様がスゴイ!!!

石田リンネ
イラスト／起家一子

"おこぼれ"で次期女王が決定したレティーツィアは、騎士のデュークを強引に専属騎士に勧誘。けれど彼はそれを一刀両断し……!?

ビーズログ文庫

俺のテキトー人生を返せ――!!!!(泣)

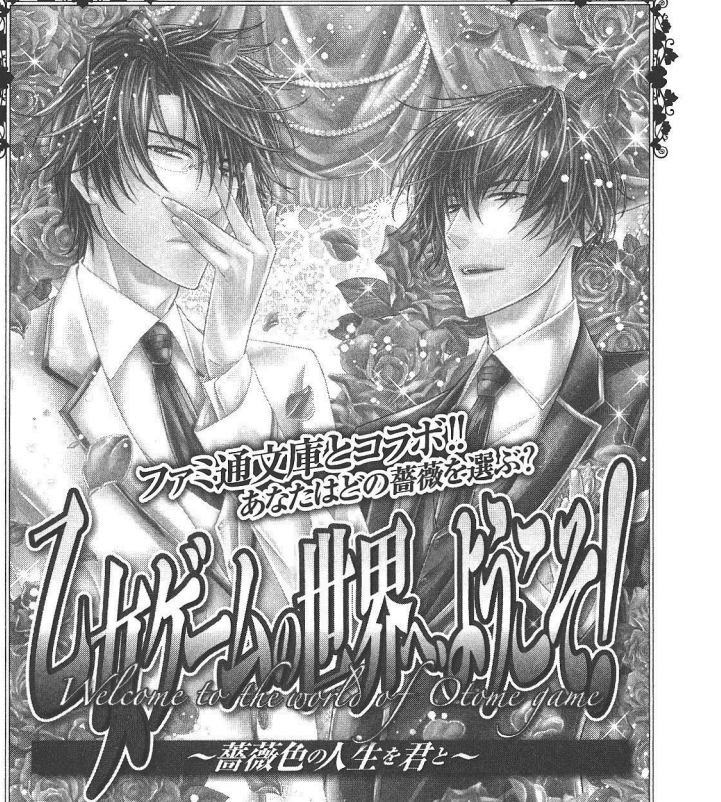


第13回 二期 えんため大賞 ガールズノベルズ部門 奨励賞受賞

テキトー王子、父になる。(七人)。

汐見(しおみ)まゆき イラスト/松本(まつもと)テマリ

釣りを楽しんでいたら、結婚が決まっていたリヒト王子。しかも……俺、パパになるの!? そして、さらに上をいく衝撃の事態が――!!



ファミ通文庫とコラボ!!
あなたはどの薔薇を選ぶ?

乙女ゲームの世界へようこそ!

Welcome to the world of Otome game

～薔薇色の人生を君と～

水澤(みずさわ)な

イラスト／文月(ふみつき)ナナ

平凡な女の子・綴莉(つづり)の前に突然現れた"大好き"な乙女ゲームの攻略キャラたち。なんで現実(リアル)に!?　戸惑いつつも彼らと親密度を上げる綴莉だが――!?



大好評発売中!

薄桜鬼 壱　薄桜鬼 弐
薄桜鬼 参　薄桜鬼 四
薄桜鬼 雪華録 ～宵～

矢島さら

イラスト／冨士原良

原作・監修：オトメイト／TVアニメ「薄桜鬼」製作委員会
オトメイト／TVアニメ「薄桜鬼 碧血録」製作委員会
オトメイト／「薄桜鬼 雪華録」製作委員会

父を捜すために、一人京へとやってきた千鶴。小雪の舞い散る夜、彼女が出会ったのは、浅葱色の羽織をまとった隊士たち――。この出会いが、彼女の人生を大きく狂わせていく……!!

©IF・DF/「薄桜鬼」製作委員会

ビーズログ文庫 & エアレイド お庭番合同フェア



「チビ白虎様ぬいぐるみ」

抽選で100名様にプレゼント!

※イラストはイメージです

さらに！ **応募者全員に特別書き下ろしミニ冊子**

（抽選に外れてももらえます）

対象書籍

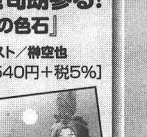


ビーズログ文庫

『お庭番望月蒼司朗参る! 入学式と不思議の色石』

著／流星香　イラスト／榊空也

定価567円［本体540円＋税5%］



B's-LOG COMICS

『お庭番 望月蒼司朗参る!①』

作画／天海寿也

原作／流星香　キャラ原案／榊空也

定価651円［本体620円＋税5%］

応募方法

フェア対象書籍のオビについている四角の応募券それぞれ1枚ずつ（合計2枚）を郵便はがきに貼り、次の項目をご記入のうえ、以下の宛先までお送りください。

①郵便番号 ②住所 ③氏名 ④電話番号 ⑤性別 ⑥年齢 ⑦職業 ⑧「お庭番望月蒼司朗参る！」へのご感想

50円切手

〒102-8431
東京都千代田区三番町6-1
エンターブレイン
ビーズログ文庫
「お庭番合同フェア」係

ウラ面

①郵便番号 ②住所
③氏名 ④電話番号
⑤性別 ⑥年齢 ⑦職業
⑧「お庭番望月蒼司朗参る!」へのご感想

2枚の応募券を貼ってね
（※文庫1種類、コミックス1種類の応募券が必要です）

応募券 応募券

オモテ面

注意事項

※応募には2種類（文庫1種類、コミックス1種類）の応募券が必要です。また、ハガキ1通につき1口の応募受付となります。
※応募券はコピー不可です。
※当選者の発表は、賞品の発送をもって代えさせていただきます。ミニ冊子はご応募一口につき1点差し上げます。
※賞品は譲渡（転売・オークション出品を含む）しないことを応募・当選の条件とします。譲渡が明らかになった場合、当選は取り消され賞品をお返しいただく場合があります。
※必要項目の記入漏れ、応募券の枚数不足、文字が判読できないなどの場合には、ご応募をお受けできないことがあります。応募券が剥がれないようテープなどで補強することをお勧めします。
※応募券を切り取った後のオビは、賞品が届くまで保管してください。
※賞品の発送は2012年6月頃を予定しております。
※賞品の発送は日本国内に限らせていただきます。
※応募に際しご提供いただいた個人情報は、弊社プライバシーポリシー（http://www.enterbrain.co.jp/）の定めるところにより取り扱わせていただきます。

応募締切

2012年4月30日（当日消印有効）

お問い合わせ

エンターブレイン　カスタマーサポート
TEL：0570-060-555
（土日祝日を除く12:00～17:00）
E-MAIL:support@ml.enterbrain.co.jp

9784047279087

ISBN978-4-04-727908-7
C0193 ¥540E

1920193005400

発行：エンターブレイン

定価：本体540円＋税

B's-LOG BUNKO

お庭番望月蒼司朗参る！ 入学式と不思議の色石

帝都学園の入学式。新入生に声をかけられた蒼司朗は、それが前日出会った、半べそをかきながら迷子を探していた異国の青年だと気づく。望威と名乗る彼が後輩だったことに驚くも、逆に「こんなニ小さくて可愛いノニ先輩!?」と驚かれて激怒！　ところが望威は笑顔で「緑ノ石を譲ってくれないト帝都が大変なことになるヨ」と言いだして……？　少年の運命が花開く、お庭番シリーズ・第十一弾！

